

火花

第 29 号

特别号～第 5 分册～

1984, 1

『プロレタリア独裁』創刊号、その「綱領」批判

I はじめに 1

II 綱領作成の諸前提への批判

(一) 何故に、綱領から党へか——彼らの総括への態度の中途半端性を批判する—— 1

(二) 綱領作成を導く彼らの総括にたいする批判 2

III 資本主義批判 3

IV 「プロレタリアートの社会革命」の内容批判 10

V 現代過渡期世界把握の完全な欠落にたいする批判 26

VI 組織 II 党にたいする日和見主義的態度を批判する 33

VII まとめ 36

VIII 注記 36

プロレタリア独裁編集委員会なる、七三年再建赤軍派の一分派が、自ら「綱領」を引っさげて、階級闘争の舞台へと登場した。綱領草案ならぬ、綱領々そのものとして提出してきたその勇氣に先ずは敬意を表しておこう。

この問題の「綱領」は、彼らの機関誌『プロレタリア独裁』創刊号に「全国の共産主義者は団結せよ！」なる一種の檄（以下「檄」と略）と、「綱領論争の総括提案」なる綱領解説（以下「解説」と略）と共に掲載されている。

ところでこの勇氣に満ちた「綱領」の内容とはいえば、いくつかの点で鋭い指摘を持っているが、その体裁、内容において多くの欠陥と誤謬をあらわにしており、しばしば「綱領」全体が時代遅れな、または超時代的なものになってしまっている。彼らの態度について率直に敬意を払う我々としては、この彼らの誤謬を丹念に指摘せざるを得ない。

II 綱領作成の諸前提への批判

ここでは、何故彼らが綱領という形で、党建設の問題をまっすくに提出してきたのか、その前提を検討する。

そして我々は彼らのこの態度の正しさ、それへの彼らの情熱、真剣さを確認すると共に、にもかかわらず、彼らはこの点を論理的にはっきりとさせず、中途半端に終り、正しさを曇らせ、かの情熱に

水をかけ、真剣さを磨滅させてしまっていることを述べる。

(一) 何故に「綱領」から党へなのか

—— 彼らの総括への態度の中途半端性を批判する ——

彼らは、党建設を何故綱領作成から出発させてきたかについて多くを語っていない。ただ「檄」と「解説」から読みとる限り次のような根拠に基づいているようだ。

- ① 日共が現代修正主義に転落し、
 - ② 前衛党が不在であること、
 - ③ 党建設の試みが過去いくども行われてはいるがいづれも失敗していること、
 - ④ 様々の「共産主義者の分派、サークル」等が存在し、経験を蓄積してきていること、
 - ⑤ 「世界プロレタリア共産主義革命」の前進とそれに対照的な日本の共産主義者の立ち遅れ、
- 以上である。

ここに彼らの綱領への願望と実際の綱領獲得への態度の開きを如実に見てとることができる。彼らは①—⑤の現実日々接し、自らその中で苦悩し、かくて「先ず革命的理論を闘いとり、思想的曖昧、政治的混迷からぬけださねばならない。革命的理論なくして、強固な革命党はありえない」(P1)と思ひ致ったようだが、問題はかような到達地平がどのような歴史性、場所性、論理性を総括しているかである。この点、彼らは情熱を溢れ出させたままに中途半端に立ちすくんでいる。(実はこれは「綱領」の内容の全体にも言える)

ことだが、これは後で述べよう)。つまり彼らのここでの欠陥は、第二のこととも関連するが、第一に今、この現在、まさに綱領が獲得されなければならぬ歴史的緊要度が稀薄であること、第二に①—⑤を見てもわかるように飽くまで日本の階級闘争の場からしか見えないこと、第三に、従来の種々の左翼の綱領—綱領問題それ自体の姿勢に着目し、これを抽出しようとしていないこと、これである。若干説明しよう。

党を創建するということは、今ある全ての政治主張、政治潮流、党派、グループとの間にきつぱりと境界を自ら引くことを意味する。今ある全てのグループ、党派、それらの政治主張、内容が、革命を闘い取ることにつながらない、無縁であることをきつぱりと宣言しなければならぬのだ。この厳しい実践的意義との関連で「革命的理論なくして強固な革命党はありえない」ということを考えなければならぬのだ。何か一般的に、「革命的理論」を結晶させ、境界線を引くことではない。この点彼らは中途半端であり、何かしら自分勝手に、先験的に「政治的分界線」を引こうとしているようである。現に今ある全ての傾向、分派等々の政治的、理論的絡み合いと誤謬とを暴露していくということが感じられない。このことは、彼らが、総括をするときにはっきりとあらわれるが、この様々の分派等の政治主張にはらまれてはいる綱領的なもの、綱領への態度を抽出していきこうとしていないことにつながっている。まずは綱領を！というとき、何よりも今ある全ての潮流がこの綱領問題でかくかくしかじかの態度の曖昧さ、日和見主義を示しているということが具体的に述べねばならない。このようなことが彼らには完全に欠落している。そしてそれ故に、彼らが正しくも「綱領」から問題提出をし

ているにもかかわらず、そのことの時代的緊要性を浮き出たせることに失敗しているのである。かかる欠陥は、彼らが綱領問題の重要性について論じるとき「世界からみる」という視座の欠落、全てが、日本について、日本からという具合になってしまっていることにより明白なものになっているのである。

(二) 綱領作成を導く彼らの総括にたいする批判

(一)で述べた彼らの綱領獲得への態度の中途半端さが、彼らの綱領獲得の必要条件である過去の綱領論争全体への総括の中途半端さとして現出している。この総括の作業は、過去の自分達の思想的、実践的系譜にそって、その内容を総括し、かつ、かかることを通じて全世界の種々の潮流への批判、総括をなすという形でなされねばならず、しかもそれは、綱領—綱領の内容に煮つめる形でなされねばならない。この点において、彼らは主観的にどのように考えているかは別として、曖昧な問題接近をしている。

具体的に検討すると、彼らの「組織的継承性」は、第一次ブント、第二次ブント、赤軍派だそうであるが、これらの総括に絶対に不可避な事項が、その検討すべき対象(文献)と共に見当らない。そもそも第一次、第二次ブントの総括が、何ら区別されることなく、ごちゃ混ぜにされ、総括内容も結局は修正主義に転落した日共より分離して、階級闘争史上いくつかの意義ある事業をなしたが、小ブル特有の誤謬を克服しなかったといった極めて一般的なことからしか述べられておらず、総括にとつて、不可欠のことである教訓として前面に引き出してくる諸点を述べるといふことをしない。飽くまで、

「良い面」・「悪い面」の指摘にとどまっている。ある組織が担った運動を総括するのには、その運動の中心文書を軸に作業をせずして、総括が可能と思っているのであろうか。あらゆる組織的運動は、自然成長的にもその運動を一つの理論へと結晶させていくものであり、そうであるが故に、全ての個々の闘争の自然成長性と自然発生性をプロレタリア革命の最大の利害の下に従属させたいく党は、当初から、いわば真の前衛たる理論綱領をもって建設されねばならぬのである。何故、彼らは綱領からはじめたのか？

ともあれ、彼らの系譜からすれば、第一次ブントについては、やはり綱領第三次草案を、そして第二次ブントは、政治過程論、第三期論、(一向)過渡期世界論、とりわけ、一向過渡期世界論をとりあげて総括すべきであった。ともかく、両者は別個にきちんと総括すべきである。そして、赤軍派については、『第4』及び国際根拠地論を。このようにしてこそ、獲得すべき綱領の立脚点は明らかになり、スターリニズム、反スター・マルクス主義、毛沢東主義への評価の基準が、前記三者のそれらへの態度の批判という形で確定していくことができるのである。さらに、スターリニズム、反スター・マルクス主義、毛沢東主義の批判が提出されず、それはそれで別個にやるという事になってしまっている。

ともかく、綱領論争の総括が、組織的総括をやることなく、一般論で片づけ、その内容については、スターリニズム批判といった形を通じて、バラバラに綱領の中にあられわれてきてしまうということになってしまい、この意味でも、何故に綱領か？ということをやわめてしまっている。

というわけで、我々も、彼らにつき合って、内容そのものは、

んでいることを暴露しているものであり、レーニンが、権力樹立後、何度も何度もこの小商品生産(ついでに言っておくが、「綱領」中③⑤の小生産者は小商品生産者としなくてはならない)に注目するように、その資本主義復活に注目するように警告していたこと、そしてまた、今、プロ独中国において、批林批孔の後を受けだプロ独学習運動のなかで、このことが、執拗にとりあげられていることに端的にみられるように、プロ独の任務を規定するという極めて実践的意義において、とらえられねばならないのである。単なる書き換え、書き足しでは済まないのである。プロ独論の内容上のことがあるのだ。この点についてはⅣで述べよう。

ともかく、この商品生産規定の欠如によって「綱領」は、超歴史化する傾向、プロ革命の内容の貧弱化を招いているのである。

第二に、彼らが資本主義批判というとき、その幅の狭さ、資本主義批判を資本制生産様式批判にすりかえている点である。一二・一八ブントに端を発する資本主義批判の大流行は、乱売、商標のいつわり、粗悪品、切り売り等をいつもながらに発生させたが、その一つの傾向として、資本主義批判を資本制生産様式批判にすりかえるというのがある。ところが資本主義批判とは、この資本制生産様式を重要なモメントとするが、それにとどまらず、国家批判、歴史批判を包括しているものなのであり、まさにそのようなものとしてしか、意義をもたない。彼らも、この点をちゃんと理解することなく、資本制生産様式批判に切りかちめ、これで万事うまくいくと考えているようだ。こういう次第であるので、彼らは、国家批判を不十分あるいは誤りにおとしこめ、また、歴史批判を欠落させているのである。国家批判の点については、しばらくおくとして、歴史批判というこ

以降批判していくことにする。

Ⅲ 資本主義批判の検討

彼らの最も自信をもっているのが、この資本主義批判であるようだ。なる程いくつかの正しい指摘を含みながらも、しかしあいにくだが、彼らの資本主義批判は、致命的欠陥を持っているといえる。

第一に問題とすべきは、資本主義社会が資本制生産関係に基づく商品生産社会であることに触れていないということである。「綱領」のどこをみてもこのことが書かれていない。商品生産について何の一言も書いていない「綱領」が、一体プロレタリア革命の指導を引き受ける党のものといえるだろうか。一体彼らは、ロシア共産党、一九年綱領にも(一九〇三年綱領にももちろん、プロ独樹立をなしたげた後のこの綱領にも)「このような社会の主要な特質をなすものは、資本主義的生産関係にもとづく商品生産である」と述べていることをどう思っているのだろうか、そもそも、マルクスが「資本論」を「商品」から何故はじめたかを考えているのだろうか。本心に信じられないことだが、商品という言葉が完全に抹殺されている！だが、百歩譲って、商品生産のことは、あまりにも当然のことなので、ちょっと忘れたのだと考えてやることはできる。事実、「解説」のところでは、商品生産に触れている。

だが、問題は、彼らがそのちょっとした度忘れに気付き、綱領を訂正すればそれで済むというものでは実はなかったのである。つまり、資本主義社会が、資本主義的生産関係に基づく商品生産社会であるという把握は、商品生産が、それがどんなに小さなとるにたりぬものであろうとも、不断に資本―賃労働関係を生み出す方向にすす

とであるが、彼らは、何故、資本主義社会が人類史前史の最後の社会として、人類史の後史即ち共産主義社会実現のための物的諸条件を成熟させるのか、また、させているのかについて無自覚である。資本主義批判とは、単なる一階級社会の批判ということではない。それは自然生長的な階級対立の最後の社会、人類史前史の総括としての社会への批判であり、その意味で、それは、人類史前史総体への批判、総括である。プロレタリアートの革命とは、まさにこのような人類史前史総体への決着を資本主義打倒を最後まで遂行することであり、革命なのであり、だからこそ、人類史の最も偉大な事業なのである。マルクスが、あくまで、資本主義社会の「経済的運動法則を暴露することが本著の最後の窮極目的である」として『資本論』を著し、この市民社会の解剖によって、プロレタリア革命の理論を明らかにしえたこと、あるいはレーニンが「マルクスは、一つの『経済的社会構成体』すなわち資本主義的構成体について述べているだけである。すなわち彼は、この構成体だけの発展法則を研究したのであって、他のどんな構成体の発展法則を研究したのでもない。」「人民の友とは何か『国民文庫版P11』と述べたことを深く考えてみるべきである。マルクス、レーニンがかく言い、振舞ったのは、他でもなくこの資本主義社会の歴史性、その特殊性を熟知し、その批判によってこそ、その批判によってしか、プロレタリア革命の、つまり、人類史前史全体の決着付けとしてのプロレタリア革命の物的根拠を明らかにしえないと考えていたからである。スターリンのように、歴史過程の中に足りないものを探し求める必要もなく、というより、そうしてはならないことを十分に知りつくしていたからである。

「綱領」はかかる資本主義への根本的見方が欠落しているが故に、賃労働制度が一つの奴隷制度であることにはかり固執し、それに足すべくわれ、かえって、賃金奴隷制というこの特殊性を明らかにすることに失敗している。資本主義社会の階級が、そしてその階級対立が、最も鋭く、単純で、最も完成されたものであることを見ぬけていないのである。

第四に、「資本の開化的側面」、すなわち、プロレタリアートの革命的諸条件の成熟という点への無自覚の問題である。「解説」においては、この点について論示された『資本論』の箇所をいくつも引用しておきながら、「綱領」中では、⑦に「労働の社会化」としてだけ述べられている。彼らが、「労働過程の社会化」ではなく「労働の社会化」の方がより包括的な概念だと気付いたのは良かったが、何とも悲しいことにその内容に無知であったといえる。いくらそれが内容豊かで、全体的概念だとしても、なんであんな風に、あんなところにボンと放り込めるのか、そもそも「労働の社会化」なる表現を、そのまま綱領の中に持ち込むことは不可能であろう。何故、レーニンは「小委員会の綱領草案に対する意見」(『党綱領問題』一 P 一二五—一四二；国民文庫)に於て、草案の「技術の改善は、仕事場の内部での労働過程を社会化し」云々としう所に対して「労働の社会化」ということは、けっして仕事場の内部で生じる事からにかぎらない。この箇所は訂正を要する」(同前 P 一三八)と述べながらも、一九〇三年綱領では「技術の改善は、生産および流通の手段を集積させ、資本主義企業における労働過程を社会化することによって」云々となり、また、一九一一年綱領に於てもそのまま無改正であったのか。レーニンほど、綱領の表現の一

件に盲目となつてしまつたのである。マルクスは次のように述べた。

「資本がこの剰余労働を次のような様式および諸条件—すなわち、従来の奴隷制、農奴制などという諸形態のもとでよりも、生産諸力、社会的諸関係の発展のため、および、より高度な新社会の諸要素の創造のために一層有利な諸条件—のもとで強制するということは、資本の開化的側面の一つである。」(マルクス『資本論』前掲) 社会的生産過程の不断の革命による労働の社会的生産力の発展(協業、社会的分業(含工場内)の発達、科学、技術の意識的な応用等によつてもたらされる)があること—もちろんこの一切は労働者の犠牲によつての資本の生産力としてしかあらわれないが—小商品生産者の不断の駆逐、婦人、子供、「外国人」労働者の生産過程への投入、産業予備軍の形成、恐慌の発現、そしてプロレタリア自身の結合の増大と密集、資本の生産過程自身による教育等々があること、これらが、綱領の中にはっきりと示されていないならぬ。つまり、資本制生産の発展の本質からして、必要労働時間の短縮を不断に拡大すること、階級対立を単純化すること、しかも一層深く、鋭くすること、更にプロレタリアをおのずと教育し、結合、密集させること、この点である。「綱領」は、表現を簡潔にしようとするあまり資本を一つの運動としてとらえ、プロレタリアの物的諸条件のその過程で成熟させるという最も大切なところを切りおとしてしまったのだ。例えば、「綱領」で「被搾取労働大衆の不満もまた増大し」というとき、何故「増大」するかが、どのような過程でそうなるかがわからなくなっているのである。

第五に、「資本の蓄積」という表現によつて、資本の運動、過程性を否定し、資本制生産を何かしら固定的、静的にとらえているこ

字一句に極めて厳格な、時としては行き過ぎとも思われるような厳密なものを求めた人はいない。このことを考え合わせて先のことを検討すればおのずと、レーニンが「労働の社会化」に「労働過程の社会化」をとつてかわらせることの不適切さを認めただらだということがわかる。なぜなら、レーニンは、労働の社会化を次のように指定していた。「資本主義的生産による労働の社会化とは、けっして人々が一つの場所を労働するというところにあるのではなく(これは過程の一小部分にすぎない)、資本の集積にもなつて、社会的労働が専門化し、各産業部門における資本家の数が減少し、独立の産業部門の数が増大するということ—数多くの分散的な生産過程が一つの社会的生産過程に融合することにある。：：：このことは生産者の間の社会的関連がしだいに強まり、生産者が一つの全体に結集されていくことを意味する」(『「人民の友」とは何か』P 六六；国民文庫)。また『ロシアにおける資本主義の発達』では、より具体的に七つの過程に則して分析している(三、P 一九八—九国民文庫)。つまり、労働の社会化の内容は、レーニンも強調する如く単なる仕事場の中だけのことでなく、資本主義的生産の発展の包括的内容なのであり、それ故、そのまま綱領に入れることをやめ、その内容をより具体的に表現したのである。ところが、彼らの方はと言えば先のレーニンの「意見」を発見(?)して、それで有頂点になり、内容についてきちんと検討することもなく、それを挿入すれば、綱領はより正確になると思い込んだのだ。不幸なるかな、である。

このように労働の社会化ということをよくわかりもせず、「綱領」にマズク放り込むことで、資本の開化的側面—プロレタリアの物的諸条

と。

第四の最後で触れたように「綱領」は、資本を一つの運動として把握することができずにそれを何かしら固定的にとらえてしまつていのだが、そのことは、「綱領」が、その運動、過程を「資本の蓄積」と表現してしまつていふことに如実にあらわれている(「綱領」③及び④)。ここでは、この「資本の蓄積」が、

- ① 所有と労働との分離を不断に生産し、
- ② 一方により多くの、大きな資本、一方により大量の賃労働者を生み、
- ③ 独立した小生産者を駆逐して、その多くをプロ化すること、
- ④ 婦人や児童を大量に生産過程に投げ入れ、
- ⑤ 生産手段に投入される資本部分に対して、労働力の購入にあてられる資本部分を相対的に減少させ、相対的過剰労働者軍をますます大量に生む、

という具合になつていふのだが、これは完全な誤りである。まさにこの資本の蓄積が、どのように資本の運動の過程でなされるのか、その構造が解明されねばならないのであり、①—⑤等を内容とする労働の社会化として、この蓄積がなされていく訳であるが、「綱領」では、資本の蓄積」という説明されるべきものが主語となつて、逆に説明している。労働の社会化の内容をよく調べることもなく、無造作に「綱領」中に放り込んだため、だが、それに足をとられ、①—⑤の主語とすべきものに欠き、本来の①—⑤を生み出すとされてしまふという悲劇。一九一一年綱領をあれ程一生懸命見ていたのに、とあわれみ申し上げる。

一九年綱領では、「技術の不断の改善」「この同じ技術上の進歩」という具合に述べられている。だがこの技術の改善、進歩というだけではいささか不十分であろう。例えば、生産過程へのサイバネティクスの導入ということは、単に技術の改善、進歩というだけではない。我々は、だからこの点を「労働の社会的生産力の発展（協業、分業（含工場内）の発達、科学、技術の意欲的応用等によってもたらされる）」という具合に表現する（もちろん、我々の表現も未だ正確でなく、技術概念、科学概念のより正確な指定は今後の課題である）。

ともあれ、このように彼らは労働の社会化に足をすくわれ、本来解明されるべき資本の蓄積を前提にして主語化するという誤りを犯しているために、「綱領」は、運動のない固定的な、静的な、死んだものとなってしまっている。

第六に、資本制生産の世界性について完全に捨象してしまっていること。

「綱領」ではこの世界性の問題を「労働者階級の経済的地位は、資本主義的生産様式の支配しているすべての国で同一であり、また、世界交通や世界市場の発展によつてますます緊密に結びつけられているので」云々と述べ以下のことを、かの「全ての国」の共通の事項として表現している中に示している。だが、これで、資本主義の国際的性格を述べ得たことになるであろうか。答は否である。まさに資本の運動がどのように必然的に国内市場の形成と共に外国市場を形成するのか、そして世界市場を形成するのか、ということを示すべねばならないのであり、第五と同じように、解明されるべき、世界市場が、最初から登場してしまつてはならないのである。まさに

に引用しておいた「労働者階級の経済的地位は……結びつけられているので」もたらされるとしているのだが、これはやはり誤りである。第一に右に述べてきたように、プロレタリアートと全世界の被抑圧諸民族、人民の運動との結びつきが示されないこと、そして第二に、「資本主義の発展の諸段階をとりこえて直接に社会主義にすすむ」という表現を導き出す党の世界性の問題を欠落させること、これである。後者の点は後で詳しく検討するが、ともかくこのような欠陥の故に、「綱領」は完全に一国主義、先進国主義におちこんでいる。

第七に、その他の問題について検討を加える（細かな諸点）。

③「一方の極に、より多くの、より大きな資本を」云々。ここで『資本論』該当箇所は「解説」P二八に引用されているように、「資本の蓄積は、拡大された規模での資本関係を、一方の極により多くの資本家またはより大きな資本家を、他方の極にはより多くの賃金労働者を再生産する」（傍点は我々）となっており、「より多く」「より大きな」との並列記述では厳密さを欠く。このことは、資本の集中の過程を考慮すれば極めて明白である。資本の蓄積の過程では必ずしも「より多くの資本家」が生み出されるのではなく、時には、より少ない、より大きな資本が生み出されるのであり、どちらかと言えば、後者の方が経済過程における意義は大きいのではないか。

③⑤「小生産者」は小商品生産者に変えるべきこと（これは既に述べた）

④「婦人や児童」に加え、「外国人」労働者を加えるべきである。レーニンは、一七年の十月に招集される予定であつた臨時党大会に

『共産党宣言』でも述べられているように、機械制大工業の成果である低廉、大量の商品の重砲で、そして時にはほんものの重砲で、あらゆる民族的障壁を打ち破り、資本は自分の姿に似せて世界を変える。即ち、世界市場を形成してきたのである。ここでとりわけ重要なのは、資本の運動の不可避の結果としての世界市場の形成に伴なつて、世界の様々な諸民族を前資本主義的生産関係、階級関係を残存させだまにそれを包含した形で自己の下に隷属させたこと、そして、その結果、資本ブルジョアジーへの反撃が、単に資本制生産様式の支配している国々だけでなく、全世界的になされる根拠が形成されたこと、これである。ともかく、資本主義体制を当初から一国的あるいは先進国的位相で把握するのではなく、世界的な広がりの中にとらえることが重要なのである。とは言え、もちろん、ブルジョアジーとプロレタリアートの階級関係と、その他の被抑圧階級・層との関係をゴチャ混ぜにしてよいというのではなく、レーニンがあれ程に厳格に要求したように「せひともはじめに、自分をすべつものから仕切り、ひとり、ただ、もつぱら、プロレタリアートだけをべつに分離し、そのあとではじめて」（『小委員会の綱領草案』）に對する補足意見」前出『党綱領問題』一、P一四五）他の被抑圧階級・層・民族について述べるということである。このようにことをはつきりと綱領の中に確定してこそ、はじめて、資本主義のこの世界体制を転覆する極めて実践的方針が、導き出されるのである。今ある全世界の諸闘争、運動のあらゆるあらわれをこの一点に向け収約させ、実際に打倒することができるのである。彼らは、この点について全く無自覚、無定見で、結果として完全な誤りを犯している。「綱領」は、プロレタリアートの解放運動の国際性が、先

向けての「党綱領の改正によせて」なる論文で、この問題をとりあげている。ソコリニコフの草案中、唯一採用すべき箇所として、この「外国人労働者」の問題をあげ、「この補足は採用すべきであり、むしろ拡張すべきである」（前出『党綱領問題』二、P五〇八）と述べている。ここでレーニンが言っている「拡張すべき」内容とは、このことの帝国主義段階での特殊の重要性についてであり、ソコリニコフが「ならばに、後進国から移入される未熟練の外国人労働者の労働」と付加すべきとしたのに対し、レーニンは更に加えて「安価な、またはしばしば無権利の外国人労働者」とすべきとしたのだ。ところが、この点はレーニン自身の一九年綱領のための草案（前掲P五五七〜P六〇二）にも盛り込まれず、従つて一九年綱領にも欠落している。これはどういふ訳か。推則の域を出ないが、レーニンはその問題の帝国主義段階での意義の重要性に着目していたのである。そのことの内容は、第二インター派への批判の項で、「ほとんど全ての先進国が、植民地民族や弱小民族を略奪することによつて」（前掲P五六三）という表現に改めたこと、そして逆に、資本制生産の基本的分析の項目である「婦人労働と児童」云々の所へ「外国人労働者」を入れるのは不適切と考えたからではないかと思われる。だが我々は、そのようなレーニンの考えの基本を認めただ上で、なおかつ「婦人」「児童」と共に「外国人労働者」を並記すべきではないかと思う。理由は、第六で述べてきた資本主義の世界性の問題からであり、資本制生産を当初から世界的継がりの中にとらえていかなければならないこと、そして事実として、イギリスとアイランド、インド、中国等の関係にこのことがよくあらわれていること、これである。

④ 次のことを付加すべき。「その結果、資本に対する労働の従属が増大し、その搾取の度合が高まる」(一九九年綱領より)。
もし③④⑤を受けて⑥という構成にするのならば、ここには少くとも「このことによって、労働者の賃金を労働力の価値以下に絶えず引き下げる力が働く」とかなんとかいってべきであろう。

⑤ 「資本主義の本質に根ざす過剰生産」、またまた説明されるべき事項が、ボンと出てきている。まさに綱領は、この「資本主義の本質」を説明する必要があるのだから、こんな具合にやられてはかなわない。一九九年綱領では「ブルジョア諸国内部におけるこのような事態と、世界市場におけるそれら諸国相互のたえず激化していく競争とは、たえず増大する数量で生産される商品の販売を、ますます困難にする。過剰生産は」云々。

⑥ 「それと同時に資本主義は、資本を集積・集中させ」云々。この言い方も極めてまずい。やはり誤りといわなければならない。

「資本主義」なる一つの主体があつて、これが「資本を集積・集中させる」ことになる。資本は、それ自身の運動として、集積・集中を結果していくのであつて、この運動とは別に、資本主義なる主体があつて、これが、それらを導くのではない。資本制生産の全体が、「資本の集積・集中」・「労働の社会化」を表出させるといふことを表現したいのかもしれないが、そうだとすると、既に「労働の社会化」について述べておいたように、資本の運動に則して、述べていくべきであり、このような一まとめにする安直な表現は、誤りに導くだけである。

以上、「綱領」の資本主義批判の点について検討してきたが、最後にこの項への批判を概括しておく。まず第一に、資本の運動とい

うことで理解を欠き、「成熟」とか「増大」とかいったことが、完全に解明されることなく、極めて固定的、静的な資本主義像をつくり出していること、「不断に」・「ますます」・「いっそう」という表現が、それ故、死んだ修飾語に転落していること、換言すれば、全てを「労働と所有の分離」・「資本の蓄積」の問題に押し込み、資本主義を一方における資本の蓄積、他方における隷属、貧困として一面的、固定的に批判していること。

その結果、第二に、資本の開化的側面について見ることができず、それ故、我々は、彼らがスターリンを批判して、スターリンに投げかけているマルクスの次のことばをそっくりそのまま彼らに投げつけることができる。即ち、「どうして今日の資本主義社会の中に、労働者にかの社会的災禍を打破する力をえさせ、又打破せざるをえなくする物質的その他の諸条件が最後のにつくり出されたかを、ここではつきり論証」(マルクス『ゴータ綱領批判』)すべきであつた、と。

要するに、一一・一八ブント以来の「資本主義批判」大流行の波に呑み込まれ、「原則的部分、原則的部分」とワメきすぎ、それをあがめたてまつり、それに拝跪し、賃労働が資本に隷属していること、賃労働制は一つの奴隷制であることにこり固まり、その歴史性を完全に捨象してしまつたのである。ところで、かかる悪しき傾向は、我々が既に「第三に」というところで触れておいた歴史批判についての全く誤つた態度からきている。というより歴史批判がないのだ。赤軍派に典型的なスターリニズム歴史観、即ち、歴史法則主義への屈服(『Ⅵ4』に象徴)をきちんと克服しえていないために、その裏返しとしての歴史捨象、運動の否定が結果して

くるのである。再びここでも強調しておきたいが、何故、マルクスが、プロレタリアートの経済的地位の解明を市民社会の解剖として遂行することで、プロレタリアートの解放に人類全体の解放の理論を築きえたのか、また、何故にレーニンは「人民の友」とは何かの中で、あれ程執拗に『資本論』は、資本主義的社会構成体だけを対象としていると強調しているのか、このことを、考えてみるべきであろう。彼らは「解説」P二〇の上段から下段にかけて、この点について、レーニンの『カール・マルクス』なども引用しながら述べているが、その意味するところを深く理解しなかつたようである。だから彼らのスターリニズム批判もこの点で不十分である。彼らのスターリニズム批判は、とどのつまり、次のようなことに帰着してしまふのである。スターリニズムが、プロレタリアートとブルジョアジーの関係を被搾取と搾取との関係にしてしまつてゐることを批判するのは良い。なる程、彼らの言うように「搾取」というのは、奴隷社会でも、封建社会でも存在したし、地主と農民の場合にも存在して」(P三九)おり、搾取―被搾取というだけでは「ブルジョアとプロレタリアの特殊な歴史的性質は何も明らかにされない。」(前出)；若干補足だが、ここでブルジョアとプロレタリアという具合に個々の人格をもつてくるのは誤りであろう。厳密には、ブルジョアジーとプロレタリアートとすべきである。)

ここで彼らが強調するように、経済的隷属をもつてくるのはその限りで正しい。しかし問題なのは、隷属一般からは区別される経済的隷属の歴史性、その具体的内実である。ブルジョア社会においてへプロレタリアート―ブルジョアジー―関係おいてはじめてむきだしの経済関係の形に結晶するものとしての階級対立こそが、分析さ

れ暴かれる必要がある。それまでの歴史諸時代にあつた階級関係は、人格的な依存関係等をつつわりつかせたものであり、そうした諸々の関係が別がれて、むきだしの経済的關係に階級関係が転化するこゝとによって、階級、階級関係、その非和解的対立性も完成したのである。そのような関係の実態、その深化・拡大の暴露こそ資本主義批判のポイントである。

プロ独編集委の諸君は、資本の運動全体において、そうした暴露を遂行しえていない。

さて、次に、第三に「世界」を忘れ去つてゐること。資本主義批判という場合、その根本から、世界的つながりを暴露し、批判する必要がある。彼らの論理展開からすれば、Ⅰにおいてはあくまで一国的―先進国的世界にとどまり、Ⅱで世界的世界という具合になつてゐる。『共産党宣言』に述べられてゐる世界市場の形成、そして、それに伴う全世界的なプロレタリアートとブルジョアジーとの階級関係を基軸とした抑圧―被抑圧関係の形成という点は、無条件に復権させ、綱領に加えられねばならない。何故に今頃、第二インター流の狭い一国的、先進国主義に後退させる必要があるのだ。

Ⅳ「プロレタリアートの社会革命」の内容批判

Ⅲで述べてきた彼らの資本主義批判の狭さ、底の浅さ、誤謬の故に、当然にも「プロレタリアートの社会革命」の内容は、狭い、底の浅い、誤謬に満ちたものになつてゐる。実を言つて、この領域こそ「綱領」の中で最も貧弱な、最も誤り多いものなのである。「綱領」のこの部分を読んだ人は、誰でも次のような思いを禁じえない

であろう。「一体自分は、今どんな時代に生きているのか？ 一九七五年、ロシアでのプロ独樹立をずつと過去のものとせばかりでなく、プロ独中国、朝鮮北部、ベトナム、キューバ等の豊富な経験を持っている一九七五年なのか、それとも、ロシアにプロ独が樹立された一九一七年、世界で初めてプロ独権力ができた一九一七年なのか？」と。一体、彼らの知性や感性はタイム・カプセルか何かで、一七年当時に行ったきりになっていないのか？

ともかく、あまりに話にならないシロモノなので、まず、彼らの「綱領」中の表現を検討し、片付けて、より積極的に批判を展開していこう。

② 「この終極目標は、現代ブルジョア社会の性格とその発展行程によって規定される」、この表現は、『小委員会の綱領草案』にもあらわれており、レーニンの訂正意見を受け、②と同一の表現として、一九〇三年綱領に含まれている。だが我々は、この表現に疑問を持つ。というのは次のようなことからである。この終極目標は、共産主義社会の物的根拠は、「ブルジョア社会の性格と発展行程とによって」ますます成熟するものであることは、疑問の余地がなく、それは、その通りなのだが、問題は、第一に、そのようなことをわざわざ、かかる表現で、綱領冒頭に挿入する必要があるかどうかという点、第二に、党の掲げる終極目標の内実は、何よりも、党の実践を通じてこそ定められるということ、これである。

第一の点については、事実、一九九年綱領においては、省かれ、「世界プロレタリア共産主義革命」についての叙述がきている。我々としてはともかく、このような表現の内容は、それ以降の綱領の展開の中に表現されるべきであり、またそうできるので、わざわざ

綱領に入れる必要はないと思うのである。

さて、第二の問題だが、綱領中にそのような表現を入れるか否かについては検討を要するが、ともかく、終極目標の内実、プロレタリアートの社会革命の内実については、過去の党（われわれにとっては、マルクスの共産主義者同盟からコミンテルン、そして我々の共産主義者同盟をも含めた新左翼諸派）の実践によって規定されること、換言すれば、プロレタリアートとブルジョアジーとの階級闘争の深化の度合によって、この終極目標は、より豊かに措定されること、これである。だから我々にとってみれば、何よりもプロ独ロシアの経験、中国、朝鮮、ベトナム、キューバ等の諸経験を我々の党的実践の中に総括することによって、我々の綱領に掲げる終極目標をより豊かにし、綱領をより正しくすることができるのである。これを加味して句を書き改めれば、「この終極目標は、現代のブルジョア社会の性格とプロレタリアートの階級闘争の深化の度合によって規定される。」（もちろん、最初に言わんとしている内容とは違うことである）

ともあれ、彼らは、党の綱領に掲げる終極目標がそれまでのプロレタリアートの階級闘争の諸経験の総括によって規定され、豊かにされるし、されねばならないことを完全に見落している。それ故、一九七五年という時代に綱領をつくり出すとき、不可避に要求されるプロ独ロシアの諸経験（とりわけ、二〇年代初頭の極めて豊富な諸論争）や、中ソ論争、プロ文革、批林批孔等々のプロ独中国の諸経験、その他キューバやベトナム等々の諸経験の総括をほぼ完全に捨象し（彼らは「解説」に於ては、中国共産党への評価を必死に定めんとしているのだが、結局失敗してこの点は後に詳述し、そ

れ故、「綱領」中では、この点をスッポリと欠如させ、「中国を先頭とするプロレタリア諸国」（二一）などと、中国を必要以上に美化する結果におちいっている）、これと照応して、とりわけ、新左翼諸派における共産主義—プロ独論争に全くふれていない（第二次ブントの解体期の諸論争はとりわけ重要）。

我々にとって、ソ連共産党そのもの、そしてその尻尾に群がるソ連派共産党（マルシェ一派、ベルリンゲル一派、宮本一派、クニャル一派、コルバラン一派等々）との党派闘争は、あるいは、中国共産党はじめ諸々の毛派、又ベトナム労働党、朝鮮労働党との党派闘争は絶対に不可欠なのであり、そうであるが故に、この基準は、はつきりと綱領中に掲げられなければならない。彼らのように綱領解説の中で、ゴタゴタと説明するだけでは全く話にならないのである。なんでこんなことになってしまったのかは、彼らがⅡで述べておいたように、党派闘争の重要性を見極めず、何かしら、この党派闘争抜きに、先験的な正しいこと、真理を示そうとする態度に一つは根拠を持っているであろう。

以上、終極目標に対する態度について検討してきたが、ついで、彼らの終極目標そのものをみていこう。

これは⑧において述べられている。それは次のように整理される。共産主義社会は、労働者階級の解放—人類の解放がなしとげられた社会であり、「諸階級への社会の分裂—がなくなり、「各人はその能力に応じて、各人はその必要に応じて」が実現されている社会であり、「社会の全成員の福祉と全面的発展と」が「保障」されている社会であり、それ故、その実現は、資本制的私所有—賃金奴隷制を廃止し、生産手段を社会的所有にかえ、「社会的生産過程の

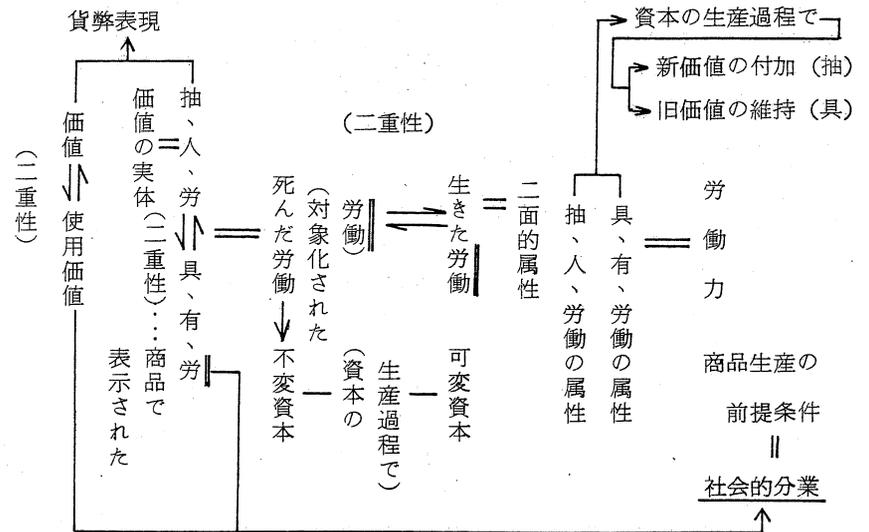
計画的組織化を実施することによって」なしとげられる。以上である。この程度の内容なのだから、⑧はわずか五行である！ 何とも恐れ入るが、こんな内容しか語らずに、一九七五年の今、「わが国の労働者階級が闘いとらねばならない、また近い将来必ず闘いとなるであろう労働者革命党の公然たる旗印として」（「檄」P一）労働者のあいだに売りに出されているのだ！ 彼らが、最初から分相応に、世界のプロレタリアにこの「綱領」を売りに出すことはあきらめていたにせよ、一体、日本列島のプロレタリアは、中国で日々展開されているプロ独の現実を全く見ていないとも思っているのだろうか。彼らの狭い、固定的な分別とは逆に、日本のプロレタリア達は、日々の職場や、地域等々の実践、日常生活の実践の中に、中国や朝鮮北部のプロ独の諸経験をとり込み、吸収し生かしているのであって、単に、外国のこととして、外的なものとしてみないのでは決してない。何度でも強調するが、プロレタリア革命の終極目標は、プロレタリアートとブルジョアジーとの階級闘争の深化の度合に規定され、豊かにされるのであり、一九七五年に提出される綱領は、これまでの一切の階級闘争から学んだ規定が盛り込まれねばならず、一九九年綱領を丸写しするだけでは、絶対に、何の指針にもなりえぬのであり、そればかりか、プロレタリアートへの犯罪といえるものなのである。

さて、より突っ込んで批判を加えていこう。彼らの資本主義批判が、既にⅡでみてきたように、資本を運動としてみず、超歴史主義におちいり、資本—賃労働関係を、賃労働の資本の下への隷属（又は経済的隷属）一般に解消してしまひ、その先にすすんでいないことをみてきた。だが、問題は、賃労働制

度の解明であったのであり、まさにこの賃労働制の廃絶が、階級支配だけでなく、一切の階級そのものの廃絶をなしとげていくものとして、その根拠を解明することであった。この点をマルクスはどのように解明したかといえ、次のように要約できるであろう。

マルクスは、一貫して階級の廃止ということ、労働、労働のありかた、労働組織への注目を結びつけて考えてきたといえる。まさにこの基本視座の下に、賃労働制度の解明を、『資本論』の中で成し上げたのである。この点を極く荒っぽく図式に示したのが下図である。

このようにマルクスは、階級の廃止―労働への着目という視座から、社会的分業―貨幣表現という深さで【注一】、『資本論』冒頭の価値論を展開している。この把握から、賃労働制度を「価値を生産するもの」としては、労働は常に個々人の労働であり、それがたゞ一般的に表現されるだけである。したがって、生産的労働は―価値を生産する労働としては―資本に対して常に、個々の労働力の労働として、個々別々の労働者の労働として、対立するのであって、この労働者たちが生産過程でどんな社会的結合をなすかは問題ではない。こうして資本は労働者に対して、労働の社会的生産力をあらわすのであるが、労働者の生産的労働の方は、資本に対してつねにたゞ個々別々の労働者の労働を表わすだけである。（『剰余価値学説史』大月版第一巻 P 五〇一）同じことだが、「剰余労働を強要し、労働の社会的生産力を自分のものだと要求することが資本の自然的属性として―したがって資本の使用価値に由来する一つの属性として―あらわれるとすれば、逆に、労働自身の社会的生産力を資本の生産力として定立することが、労働の自然的属性としてあらわれ、そして労働自身の剰余が剰余価値として、資本の自己増殖としてあら



われるのである」（同前）。かかる把握に立って、マルクスは「国際労働者協会一般規約」の中で、「労働者階級解放のための闘争とは、…；平等の権利義務とあらゆる階級支配の廃止とのための闘争を意味すること」・「社会革命とその終局目標たる階級の廃止」ということと「労働者階級の経済的解放が大目的であって」とが結びつけられて述べられ（ここで注として付言しておくが、この「経済的解放」をその広さと深さを充分把握することなく、賃労働制の廃絶に等置してしまふ傾向があるが、これは誤りである。もちろん賃労働制度の把握の内容によるが、このような表現だとどうしても、賃労働制の廃絶＝平等の義務労働制の確立という具合になって、共産主義を彼岸化してしまふのである）、また『ゴータ綱領批判』では有名な規定、「共産主義のより高度の段階において、すなわち個人が分業に隷属的な従属をすることがなくなり、それと共に精神労働と肉体労働との対立がなくなった後、労働が単に生活の手段たるのみならず、労働そのものが第一の生活欲求となった後、個人の全面的な発展に共なって生産力も増大し、協同社会的富のあらゆる泉がいつそ豊かにわき出るようになった後―その時、はじめて、ブルジョアの権利の狭い限界を完全にふみこえることができ、社会はその旗の上にこう書くことができる―各人はその能力に応じて、各人はその必要に応じて！」（国民文庫版P四五）そして、そのために、「労働日の短縮は根本条件である。」（『資本論』第三巻P八七四）つまり、『資本論』の表現をかりれば、「窮迫と外的合目的性によって規定された労働がなくなるところで初めて始まる」とも

というわけで、賃労働制度のその発生の根本からの廃絶とは、一切の労働制度（それが制度である限りにおいて何らかの強制を伴う労働である）の廃止―『ドイッ・イデオロギー』の表現では、「労働そのものの廃止」―即ち社会的分業の廃絶（その下への個人の隷属の廃絶）、労働を個人の生命活動の第一の欲求に転化させることを意味しているのであり、かくて、階級、階級差異全般の廃絶なのである。

かかるマルクスの見方は、レーニンのプロ独の現実の経験を踏えた階級概念の規定によってより明確なものになった。レーニンは階級について次のように規定した。「階級と呼ばれるものは、歴史的に規定された社会的生産体制の中で占めるその位置が、生産手段に対するその関係が（その大部分は法律によって確認され、成文化されている）、社会的労働組織の中でその役割、それ故に、自分の意のままにできる社会的富の分けまえを受けとる方法とその分けまえの大きさが、相異なる人々の大きな集団のことである。階級とは一定の社会経済組織の中に占める位置の違いによって、一方が、他方の労働を占有しようとするような人々の集団のことである。」（『偉大な創意』）。ここで、レーニンは、階級概念を単に生産手段に対する関係、したがって、所有の面でのみ考えられてきた第二インター流の見方を批判し、プロ独ロシアでの具体的経験の中から、マルクスの概念を復権させ、再規定したのである。その規定の中には、マルクスが、労働のあり方への注目から、商品生産―資本制生産を社会的分業体制を含めて把握したように、階級をそのような深さでとらえている。だから、レーニンは、そのあとつづけて、「明らかに、階級を完全に廃絶するには、搾取者、すなわち地主と資本家とを打倒する必要があるばかりでなく、かれらの所有制を廃止する必

要があるばかりでなく、かれらの所有制を廃止する必

要があるばかりでなく、さらに、生産手段のあらゆる私有制を廃止する必要がある、都市と農村の差異、肉体労働者と精神労働者の差異をも廃絶する必要がある。これは、ひじょうに長い年月を要する事業である。」と述べたのであった。しかし、レーニン自身この点については、厳密な言葉使いをしているとはいえず、例えば、十回党大会での「党の統一とアナルコ・サンディカリズムの偏向とについての報告」には、「社会に階級がなくなれば、社会には働き手である生産者しか残らないであろうし、労働者も農民もなくなるであろう。」と述べており、これが社会主義段階についてのことであるのは明白だが、ここで言われている階級の廃止とは、『国家と革命』で言われている「社会的生産手段に対する関係からみて、社会の成員のあいだに差別がなくなった」という意味での「階級がなくなった」ということなのであり、先の階級概念について言えば、社会的分業体制と不可分に結びついた「社会的生産体制での占める位置」。「社会的労働組織の中の役割」（とりわけ後者）からみても、階級がなくなった、ということではないのである。社会的分業体制が残存し、それ故諸個人のその下への固定化が残存している限りにおいては（都市と農村、工業と農業、精神的労働と肉体的労働との差異が残存している限りは）、階級を完全に廃絶したとは、レーニンの概念からは言えないのである。しかも、このことに、レーニン自身晩年に執拗にくり返し強調した、主に小商品生産者から発生してくるブルジョアの意識、習慣等々が照応し、また、プロ独期では、上部構造の意義が増大することから、その逆作用が、大きな力をもつことよって、これは現実化する。ところで、ここで更に付加しておけば、かかる差異が、社会的分業への個人の隷属とし

擬制的労働制＝平等の義務労働制（これはしかし全社会的な、一つの労働制度ではない、この点後述）を確立していくのである。だから問題は何かしら、価値法則を廃絶することを目的とするのではなく、何よりも、階級の全般的廃絶のために、その条件として、これがなされるのであり、かかる結果として、価値法則は廃絶されるのである。こうして、価値法則は廃絶させられるのだが、価値規定は残り、重要性を増す。賃労働制度の廃絶の進行＝平等の義務労働制の一定の確立の度合によって、「労働時間の規制、および異なる諸生産群の間での社会的労働の配分、最後には、これらに関する簿記が、従来よりも重要になるという意味で、依然として重きをなす」（『資本論』第三卷P九〇）からである。だが、価値規定が何故残り、重要性をうるのかについては今まで述べてきたことからわかるように、何よりも、階級が、すっかり廃絶されてしまったてはいいないこと、「社会的生産手段に対する関係からみ階級がなくなったに過ぎないからである。ここでは、社会的労働の（賃労働制の廃絶に伴って、相互に独立した、私的諸労働は、社会的分業が尚残存していくという意味において、相互に独立してはいるが、既に社会化された労働としてあらわれる）生産物は、価値規定を受けるわけだから、この労働についていえば、やはりその生産物で表示される二重性を孕み、また、その生産物つくり出す生きた労働としては、二重性を持つ。これら諸生産物は、その意味で、擬制的価値と、使用価値という二重性を孕んでいるわけである。【注二】そして、このことに、ブルジョアの意識、習慣等が結びつけば容易に二重性はあらわれてくる。ところで、この価値規定だが、それは、やはり社会的平均労働の量をその内在的尺度としているのであり、だから、

て残存している限り、生産手段に対する関係においても完全に社会の成員のあいだに差別がなくなった、と言えないのであり、もちろん、法的にはそのように宣言することは可能だが、この点でも、レーニンは、曖昧さを残し、誤解の余地を残している。レーニンは、先に述べたように階級概念を規定することで、労働のあり方、社会的労働の組織について浮きぼりにさせたのであり、「プロレタリアートの独裁は：：：たんに搾取者に対する暴力ではなく、また暴力を主としたものでもない。この革命的暴力の経済的基礎、その生命力と成功の保障は、プロレタリアートが、資本主義にくらべていっそう高度の型の社会的労働組織を代表し、実現していることである。ここにこそ核心がある。ここにこそ共産主義の力の源があり、避けることのできない完全な勝利の保障がある」（『偉大な創意』）というふうに述べ、労働のあり様から、階級全般の廃絶というプロ独の任務を想定し、だから、「社会主義とは、階級をなくすことである」（『プロレタリアートの独裁の時期における政治と経済』）と社会主義という歴史時期を、一つの運動、階級闘争、一切の階級を廃絶してゆく階級闘争の時期とみただけであった。かくして、階級、階級差異一般の廃絶は、労働そのものの生命活動への転化が実現していること（共産主義労働の全世界での実現）としてあるのである。

では次に、どのようにして、この階級全般を廃絶していくかということがあるが、これを見ていこう。

賃労働制度の廃絶から、労働制度全般の廃絶へと至るには、まず何よりも主要な生産手段のことごとくをプロレタリア独裁権力の下に集中し、分配することによって、はじめねばならない。かくして、問題は、一体この社会的平均労働はどのように決まるのかということである。資本制生産の下ではまわり道を経て、間接的に、即ち交換の世界を通じて事後的に我々に確認されることになっているが、これに対し、賃労働制度の廃絶の後の社会、マルクスの言う「協同組合的社会」（『ゴータ綱領批判』）に於ては、「個々の労働は、もはや間接的ではなく直接に、総労働の構成部分として存在している」というわけだが、それはどのようにしてか。それはまさに、「正義によって」決められるものでもなく、また現実に見えぬ形でこの社会的平均労働が実存しているわけでもないのだから、それはあくまで、「もち合わせている手段と力とに応じて、また一部は確率論によって」決められる他はない。つまりプロレタリア独裁の権力が、直接に、事前に決定していくわけである。ところで、平等の義務労働制の確立をよりつつこんで検討してみると、既に、社会的平均労働について分析したとき示されたように、全社会的な、完全な平等の、ということなど決してありえないということがわかる。労働は既に直接に社会化されるとはいえ、個々の具体性においては、強度も、密度も違い、「不平等な個人の天分と、したがってまた不平等な給付能力を、うまれながらの特権として暗黙のうちに承認」（同前）せざるをえない社会の労働なのであり、だからあくまでブルジョア的な平等でしかない。しかも、全世界的に生産の組織化をすすめていくとしても、各国、各地域毎に分割されていた労働の社会的生産力は各々において、様々の格差を持っているのであり、単一の世界権力ができて一挙にはなくすことはできないし、その差は長期にわたって残存し、所謂一切の住民を、働き手々々にすることだけではその解消はできない。もちろん、世界

単一のこのプロ独権力（連邦制権力では、そもそもかかる問題自体彼岸化される）は、不断に、この国家毎、地域毎に分断された社会的労働の生産力の格差をなくすべく、その階級闘争を組織していくのだが、社会的分業の体制が残存していく限り、何らかの形で、かかる差をなくすことはできない。更にこれに「旧社会の母斑」たる様々のブルジョアの意識が、習慣等々が、かかる物的根拠をもとに残存し、これがプロ独期に特有な強い反作用をおよぼしうるといふことが加わる。このような意味から、対馬忠行のような「完全な社会主義」像は完全なデマカセであることがわかる。対馬は、反スタ・マルクス主義者の中でプロ独―共産主義論を体系化した「有名入」であるが、彼は、トロツキズム―反スタ・マルクス主義の常として、価値関係から階級関係を導き、この転倒した賃労働―資本関係の把握から、労働力商品化の廃止―賃労働―賃労働―賃労働―賃労働の廃止、階級関係の廃止―労働証書制の出現による完全な社会主義の実現、そしてあとは、スターリンと全く同じ生産力増強運動（これには、労働一般、生産一般、共同労働一般が照応）によるスムーズな（?!）共産主義へのスベリこみという具合に、その逆立ちを拡大していくのであるが、この対馬の誤りは、資本―賃労働という非和解的階級対立の關係が、価値関係―価値法則を通じて維持、拡大されていることを逆転して、価値関係―価値法則から階級関係を説明し、労働力の商品化こそ悪の根源という具合に思い込んでいるところがあり、したがって、階級の廃止を価値関係―価値法則の廃止、労働力商品化の廃絶から説明していくところに拡大してしまっているのである。だが、我々が、ずっと強調してきたように、階級全般の廃絶のために、賃労働制度を廃絶し、平等の義務労働制を確立し

うことである。生産手段の分配、六項目控除の決定、消費手段の分配等を含めて、社会の政治、経済生活全体にわたって党が、階級全般の廃絶を目指して共産主義的無償労働を一つの重要な運動として含む、共産主義運動を党が当初より組織化していかなければならない。このことに従属したものとして、あるいは、その結果として平等の義務労働制度の確立、等々があるのである。

共産主義労働とは、『ゴータ綱領批判』にもあるように、諸個人にとって生命活動の第一欲求に転化した労働である。問題はかかる労働の転化が、生産力の増強だけによつては決してなしとげることができず、また、結局そのことに行きつくのだが、生産手段の全ての私有制の廃絶、平等な義務労働制の確立、そして、その擁護のための闘争といったことだけでは、決して到達しえないことにある。まさに、かかる種々の手立てが、一方におけるこの共産主義的労働がそもそも初めから準備され、育かれ、拡大されていくこと、というよりは、かかる手立てがこの共産主義的労働の準備、育成、拡大の手段としてなされるのである。

プロ独、社会主義社会、共産主義社会という区分との関係でこのことを言えば、世界単一のプロ独の樹立後（世界単一プロ独と一国的プロ独との連関、区別については後述）、党の指導の下に生産手段のプロ独権力への集中、分配、生産の組織化、平等の義務労働制の確立を、共産主義的無償労働の系統的な組織化を基礎に遂行する。そして、平等の義務労働制の全世界的な構造的定着化をもつて一応社会主義社会の樹立を述べることができる。だが、この社会主義社会の樹立も、何か飛躍的な段階区分があるのではなく、プロ独はひきつづき存続し、共産主義的無償労働等の共産主義運動の拡大を遂

てこの価値法則の廃絶に導くのであり、しかも、階級というものが、かかることによつてのみではすっかりなくなってしまうわけにはいかないものであるのだから、対馬は何とも救いようがないのである。さて、以上述べてきたことからわかるように、賃労働制度を廃絶して、平等な義務労働制度に転換していくことをもつてしても、階級はすっかり廃絶される訳ではなく、これに照応して、ブルジョア的な意識・習慣等の残滓があり、不断に、下部構造に逆作用をおよぼし、価値規定が残り、労働の生産物は、それに表示される労働の二重性を孕み、かくして、生産力を増大しても、その延長には、そのままでは、決して、共産主義労働に到達せず、かえって逆に、ソ連に見事に示されているように、ますます顕著になり、ますます拡大される階級差異、社会的分業の固定化が結果してくる。そして、労働の量に応じた分配は不可能になり、労働の質に依じた分配が、支配的になる。この突破はどうするか。

ここで我々は、プロ独ロシア―ソ連、中国、キューバ等々の革命―社会主義建設の経験から少くとも次のことを理論的―実践的問題としておさえておかねばならない。

まず第一に、経済学の見地からあれこれのメルクマールを抽出し、実践を組織しようとするこの限界である。既に述べてきた平等の義務労働制度の確立に伴つての種々の方途も、それらは一つの階級闘争として組織されねばならないものであり、その意味で、経済学からおさえうる範囲をこえていく。

第二に、これも既に述べたことから示されるように、共産主義社会を実現するためのプロレタリアートの革命を最後の最後まで指導し抜くための党の目的意識性・組織性こそ最大のポイントだとい

行していく中で、一切の階級、階級差異をなくしていき、かくして、全社会の成員が、共産主義無償労働を当然の慣習として遂行するようになったとき、即ち「他人より半時間でもよけいに働かないように、他人より少ない報酬をうけとらないように」とシヤイロツク流の冷酷さで人にそるばん玉をはじかせる『ブルジョアの権利の狭い視野』をふみこえたとき、党的目的意識性が社会の全ての領域で習慣にまで高まり、党が社会の中に消滅したとき、その全ての任務を最終的に終え、消滅する。そしてこのとき「ブルジョアの権利」の規制者としてあつた国家機構はそれ故死滅する。共産主義社会が、「真の自由の王国」が到来する。つまり、プロ独―社会主義―共産主義という三区分別は絶対にとれないということである。

ここで、国家の死滅の問題に焦点をあてて述べると、今まで述べてきたことからわかるように、我々は、スタ―リニズム、反スタ・マルクス主義（彼らはこの部類）に共通な、資本主義社会でのブルジョア独裁の国家―プロレタリア独裁の国家（過渡的な国家）―国家でない国家―社会的統制機関―国家の完全な死滅というよりな区分はとれないといふことがある。主に反スタ主義者がそう強調するのだが、社会主義社会での階級の廃絶から国家の死滅と、レーニン『国家と革命』の、「事実上の不平等を神聖化する『ブルジョアの権利』の保護」を任務とする国家については、それは国家でない国家、「計算と統制」を主要な任務とする国家的なものといった具合に歯切れ悪く、モゴモゴ言うわけだが、しかし、レーニンのいつている社会主義社会での「計算と統制」の必要性は、何よりも「資本主義社会の母斑」たる階級、階級の差異の残存の故なのであって、これ以外では絶対にならないのである。こういう点で、どこまで唯物論

死滅と規定し、かくてプロ独の死滅＝共産主義社会の実現としてい
る。かくて、プロ独は共産主義の第二段階まで続くこと、そこに至
るまで階級、階級闘争は存続し、国家は残るといふ主張をするので
ある。この中国共産党の主張は、やはり、レーニンの曖昧さを克服
し、スターリニズム、反スタ・マルクス主義の両方の地平を一步乗
りこえていると評価しうる。だが、この中国共産党の主張の内容は
次の点で中途半端性を示し、不断に動揺を伴っている。つまり、第
一点は、世界と一国との関係を曖昧にしていること。中国共産党は、
この点については全く触れないことで通している。だが、この点は、
中ソ論争、プロ文革、批林批孔等の中で、実践的面において、第一
義の問題、即ちプロ独＝社会主義建設期での階級闘争の重要性、世
界革命との関連でのその重要性といったことを浮き出させている
ということはいえる。金日成が、この世界＝一国の関連を確定しよ
うとして、チンブカンブンに陥ったことを考えれば、毛沢東の方
がカンコイといわねばならぬであらう。だが、このままにしている
限りは、スタートロ両派の地平を完全にはのりこえられないことは
自明である。我々と中国共産党との分岐はこの「世界」の問題にお
いて最も鋭いものである。

第二に、第一のこの結果として、一国プロ独の任務＝世界単一
プロ独樹立のための根拠地として一国プロ独をうち固める＝が曖昧
にされる点である。彼らは、毛沢東指導下で、プロレタリア文化大
革命を組織し、ベトナム＝インドシナ革命戦争の激化に備え、世界
革命の根拠地としてプロ独中国を打ち固めつつ、そうした階級闘争
全体を、「継続革命論」に矮小化し、世界革命の根拠地という点を
曖昧にした上で、単に資本主義復活を防ぐという国内問題に閉塞さ

義社会を労働日の短縮を根本条件として、何よりも共産主義労働（
生命活動の第一の欲求に転化した労働）の実現した社会として措定
しなければならぬのであり、これなくしては、共産主義社会とい
うこの最終目標は人それぞれに勝手なイメージづくりの競い合いに
なってしまう、百人いれば百の共産主義社会が、例えば、疎外され
た労働が完全になくなった社会、全てに自由がある社会、全人類が
解放された社会、個人の全面的発展がなされる社会等々という具合
になり、決してプロレタリアートの革命を最終的勝利にまで導くこ
とはできないのである。彼らもこの点に全く無自覚であるため、「
社会の全成員の福祉と、全面的発展とを保障する」などと言ってお
茶を濁しているのである。ところで、この表現は、一九年綱領に
あるわけだが、この源は、レーニンのブレハーフの第二次綱領草
案に対する意見の中に求められる（『党綱領問題』一P二七）。だ
が、レーニンが一九〇二年にあらわした表現が、プロ独樹立後の、
一九年綱領に残されていることこそ、レーニン自身の歴史的境界と
して我々は総括しておく必要があるのだ。もちろん、その表現自体
は正しいし、共産主義社会は、事実、かかることを実現しているで
あらう。だが、問題は、このことを何かプロレタリア革命の第一義
的な目的のようにして、綱領の中に入れるのはやはりマズイという
ことであり、マルクスの言ったように、「労働そのものが第一の生
活欲求となる」といったほうが、より正確なのではないか、という
ことである。ともかく、一年半未満とはいえ、現実のプロ独の経験
の中から、「最終目標」の豊富化がなされる必要があるということ
は他ならぬスターリンであった訳であり、その意味でスターリン

せてしまったのである（何のために資本主義復活を防ぐかという点
での曖昧性、一国性、経済主義）。かくして、毛沢東死後「四人組
追放後の急激な右旋回が平然と遂行された。
さて、我々は更に、ロシアでの二〇年代に大いに展開された諸論
争＝労働組合論争、国家・政府論争、軍＝民兵論争、工業化論争等
々、並びに、第二次ブントの解体期の種々の論争について検討し
ておきたい。とはいえ、ここでそれらを全面的に検討しようという
のではなく、プロ独＝共産主義論争との関連でのみ大まかになそう
というのである。（以下略）

さて、以上に展開してきた内容によって、いよいよ、わが「プロ
独編集委」の諸君の「綱領」該当箇所をより詳しく批判しておく。
まず、彼らの「プロレタリアートの社会革命の最終目標」＝共産
主義社会の規定だが、マルクスが『ゴータ綱領批判』で述べたよう
に、社会的分業への個人の隷属の廃絶、一切の階級的差異の廃絶、
共産主義労働の実現として、階級全般の廃止の内容が規定され、か
くして「各人はその能力に応じて、各人はその必要に応じて」と述
べられるのではなく、ただ「諸階級への社会の分裂をなくして、『
各人は：』を実現し」と述べられているに過ぎない。と共に、別
のところでは、「社会の全成員の福祉と全面的発展とを保障」されて
いる社会として、共産主義社会を考えている。だが、何よりも、プ
ロレタリアートの革命は、資本主義を根こそぎにすることによって、
人類史の歴史総体に決着をつけ、人類史の歴史を実現する革命なの
であり、それ故、共産主義者は、その最終目標についてきちんと確
定し、一から目的意識的にその実現に向け、プロレタリア大衆、被
抑圧人民を領導していかなければならないのである。つまり共産主

はレーニンの歴史的境界の忠実な弟子であったわけである。かかる
誤謬は、スターリン以降の全てのスターリニストによって後生大事
に掲げられていることは周知のことであり、レーニンが、先の『意
見』で、「社会の全成員」の全、「完全な」、「全面的」にそれぞれ
傍点を付して強調しておいた意味内容は全て忘れ去られ、スウェー
デン流の「福祉国家」像を目標とするに至っているのである。

このように彼らの「最終目標」は貧弱なのだが、問題は、そもそ
も彼らが「最終目標」としている「共産主義社会」とは一体、マル
クスのいう第一段階と第二段階のどちらを指しているのか、という
点であり、どうも、彼らは、第一、第二の区別をこのことに於ては
つけずに、共産主義社会として、これを最終目標にし、それ故、結
果として、第一段階のみを、プロレタリアートの革命の最終目標に
して、あとは、自然成長的に、水の高きから低きに至る如く第二段
階に至ると考えているのではないか、という点である。彼らは、こ
の共産主義社会の実現のメルクマールを「階級（支配）の廃止＝国
家の死滅」（P四五、下段）としている。ここで（ ）内の支配と
いうことに疑義をさしはさむ必要があるのだが、今はそのままにし
ておくとして、この措定自体は正しい。にもかかわらず、そのより
一步つっこんだ内容、即ち階級の廃止とは、一体何を意味するの
かが問題である。そして、このことをはっきりとさせるには、階級と
は何かをはっきりとわかっているなければならぬ訳だが、彼らは、
このところを全く曖昧にしたままにし、それ故、階級の廃止とは一
体いかなることを指すのかがはっきりさせえず、第一段階と第二段
階の区別の本質をつかみえず、それについて長々と述べたていな
がら、全く何もわかっていないと言わねばならない。このことは、

何よりも彼らが、資本主義批判をその根底からなしえず、中途半端にしてゐる故である。即ち彼らは、マルクスが一貫して労働―労働制度に着目し、そこから階級を考え、資本主義批判を深めていったこと、そして、『資本論』の中で賃労働制度の解明をかかるとして社会的分業も包括して成しとげたのであったこと、だから、この賃労働制度の下での労働が、科学や技術の不断の応用等々によって膨大な社会的生産力としてあらわれ、「あらゆる人間の諸力そのものの発展」(マルクス『資本主義的生産に先行諸形態』国民文庫 P 三二)の条件をまさにつくり出すわけだが、にもかかわらず、それは、ただ資本の開化的側面としてのみあらわれ、資本の生産力として一切が現出するのであり、一方の個々の労働者たちは、「この労働の社会的生産力の発展につれてますます苛酷な」(『ゴータ綱領批判』)状況におち込むのであることを暴露したことを深く見抜かず、資本の下への賃労働の隷属というこのみ強調し、結果として、双隷一般に賃労働者を解消し、かくして、マルクスが、賃労働制度の廃絶を全ての労働制度の廃絶として深く把握し、共産主義社会を、労働が生命活動の第一の欲求となつた社会、換言すれば、「窮迫と外的合目的性によって規定された労働がなくなった」社会として措定したのであることを見抜かず、賃労働制度廃止一般として語ってしまったのである。

このように彼らは、資本主義批判を不十分にしかなしえなかつたが故に、資本主義批判から導き出しうる(またそれ以外にない)「共産主義の経済的成熟の諸段階」とも呼ぶべきもの(『国家と革命』岩波文庫版、P 一三八)について何ら語りえず、第一段階の「旧社会の母斑」の経済学的意味について無知になつてゐる。そして

い個所は全く引用されていないところが彼らの特徴だが)。若干ゴータ述べたが、つまり、この「旧社会の母斑」の社会経済構成上の内容とは、労働制度がすっかりなくなつておらず、全社会的な一つの制度というわけではないが、平等の義務労働制度が残つており、つまり、諸個人の社会的分業への隷属が残存し、三大差異と呼ばれる階級的差異が残つてゐるということであり、つまり一言で言つて、階級全般を未だすっかりなくしてしまつてはいないこと、これである。そして、このことこそが、ブルジョアの意識、習慣、因習等々の「旧社会の母斑」を残存させるとともに、不断に生み出し、また逆にこの時期はとりわけ強い力を持ち、それからの反作用によつて、かかる経済的な「母斑」も温存され、助長されるという事態が可能としてあるのである。ところが、彼らは、このようなことに全く無自覚で、とりわけ今述べたように、「旧社会の母斑」を、資本主義批判からとらえられず、つまり、あくまで唯物論者としてふるまえず、観念論者になつて、「旧社会の母斑」を「道德的」・「精神的」・「文化的」なもののみ狭めてしまつてゐる。何故かといふと、彼らは、共産主義の第一段階で既に階級対立が廃絶され、階級もなくなつてゐると考へてしまつており、こうならざるをえなからのである。こうして、全くマズク『偉大な創意』などが引っぱり出され、「自覚―団結した労働者の規律」・「自発的な自覚―団結した労働者の規律」(共に P 四三)といったことがワメキ立てられ、日本型毛沢東カブレの精神修養に転落してしまふのである。このよりの精神修養主義の発生の根柢は、赤軍派の解体期に必然化されたプロ文革以降の中国への勝手な思い入れなのだが、いかんせん、この中国舶来の毛沢東主義は日本海を渡つてくる間に、塩水でプヨブ

それ故に、彼らはレーニンが、「政治的には、共産主義の第一の段階または低度の段階と高度の段階との差異は、早晩、おそらく巨大なものとなるであろう。」(前出 P 一三七)と述べた意味を全く理解できていない。我々が既に分析し、強調しておいたように、共産主義の第一段階で残存する「ブルジョアの権利」・「旧社会の母斑」の持つ意味は、マルクスも述べている如く、「それ(第一段階―我々)は、あらゆる点で経済的にも精神的にも、それがうまれてきた母胎である旧社会の母斑をまだおびている」(『ゴータ綱領批判』)こと、また「権利は社会の経済的構成およびそれによつて制約される文化の発展よりも高度であることはできない」(同前)こと、つまり、「ブルジョアの権利」は完全に廃止されるのではなく、ただ部分的にだけ、すでに達成された経済的変革の度合に応じてだけ、すなわち生産手段に関してだけ、廃止されるのである」(『国家と革命』P 一三二、傍線―我々、傍点―レーニン)というところにある。この「旧社会の母斑」の経済学的な意義、社会経済構成上の意義について、明白な見解が必要なのだ。彼らはこの点を明らかにしえない。レーニンはこの点を更にはつきりと言つてゐる。

「資本主義を打倒したのち、人々がなんらの権利の基準もなしに社会のために働くことを学ぶなどと考えることは、空想におちいることとなしには不可能であり、しかも資本主義の廃止は、このような変化のための経済的諸前提をただちにあたえるものではない」(同前)。念のために言つておくが、この「経済的諸前提」等の意味は、スターリン流の生産力の十分な発展及び、それに解消されるものではないことである。この点は、彼らも同意するであろうが、とすれば、この意味内容を厳密に明らかにすべきであつた(こういう具合の悪

ヨにされてしまふ、日本に着いたときには、物的な階級的基盤と、そして何よりも政治が完全に洗い流されて、日本の精神修養主義にされてしまつてゐるという具合だ。精神修養によつて、共産主義の第二段階へ。こういう次第だから、社会主義社会における国家、即ち「統制機関(ここでは計算と統制が主要な機能)とは、『自覚した労働者の規律』に基づいて組織された社会的労働組織なのである」(P 四四)と完全なデタラメに陥るのである。統制機関が、社会的労働組織だつて? だが無理もない。エンゲルスから引用したレーニンの「国家の機能のもつとも主要な部分が、労働者自身によるこのような計算と統制に還元されるようになるならば、国家は『政治的国家』たることをやめて、『公的諸機能は、政治的な機能から単純な管理機能に転化する』」(『国家と革命』P 四一、彼らは P 四四)といふことを、教条的に受け入れてゐるのだから。だが、レーニン自身が述べてゐることは、この「単純な管理機構」もやはり「統制」即ち強制機構であり、「社会のがわからずと国家のがわからずとのきわめて厳格な統制」(同前 P 一三六)なのであつて、ここで、誰が、どのようにという問題で、レーニンが「人民の大多数が」(同前 P 一四二)といふとき、それは誰が「社会のがわからず」の問題であり、「国家のがわからず」をはつきりとさせねばならぬのであつて、この点を欠落させて、何かしら「自覚した労働者の規律」に一般的にこれを解消させてはならないのだ。「死滅しつつ」であれ、「統制機関」であれ、国家は国家である。しかも、「旧社会の母斑」は、決して、自然成長的ではなくならないのであり、目的意識的なその廃絶の運動が必要なのであるから、その意味で、かの「統制機関」は政治的性格をおびざるをえないのである。この「統制機関」

を様々の表現で国家でないと言いくるめるのではなく、我々が公然と述べたように、それは、党を核とするプロレタリアートの独裁機関に他ならないのである。もちろん、それは、プロ独樹立期に比べると著しい変容を上げてきている。それは、次々とその機能を縮小させていっている。にもかかわらず、統制機能が少しでも残っている限りにおいては、それは、その機能を担うものとして残っている。党は、完全に階級がなくなり、国家が死滅するまで、全責任をはたさねばならず、プロ独はそれまで任務を遂行しつづけねばならないのである。まさに、共産主義社会の実現のために、社会主義の全歴史段階を通じて、党は、プロ独の中心任務を、共産主義的無償労働の系統的組織化におき、一切の「旧社会の母斑」を一掃しなければならぬ。彼らのように「全ての『勤労者』に様にこの仕事をはたす能力がある」と考えるのは、時代おくれのマルクス以前の社会主義者のこのうえない空文句か幻想である」(P四三「偉大な創意」)と気付くだけでは十分ではなかった。更に一步すすめて、「全てのプロレタリアートに様にこの仕事をはたす現実的能力があると考えるのは、時代おくれのマルクス、レーニン以前の社会主義者のこのうえない空文句か幻想である。」と考えてみなければならなかった。旧社会の母斑は、プロレタリアートにも広汎にとりついでいるのであり、それ故、プロレタリアートの先進的部分、まさに黨員が核となつて、この任務を遂行しなければならぬ。党は、厳密にこの区別をつけ、党の整風を引きつづき行い、共産主義的労働の全社会的拡大、即ち黨員の拡大をめざしていくのであつて、これを中心とした全領域での「旧社会の母斑」の一掃の党による闘いを完全に忘れ去つて、「意識的な『真に大衆的な前進運動』」に全てを自

の模範と言わず何と呼ぼう。彼らは、二十年代初期のプロ独ロシアにおいて激烈に展開された種々の論争に対して、そしてそれ故に、第二次ブント解体期の諸論争をきちんと総括しようとしないうから、こゝろなつてしまふのだ。プロ独樹立後、それ程時間もたつていず、またロシア一国という中でさえ、否、そつてあつたからこそ、今我々が述べてきたような共産主義社会(第二段階)をも射程に入れた(というよりそれこそ一番の問題であつたのだが)諸論争が、全ての領域でなされたのであつた。党、国家、労働組合の相互の問題、人民委員会議と全ロソビエト大会、全ロ執行委員会の関係の問題、正規軍と民兵の問題、赤軍は国家の軍隊か党の軍隊か、党中央委員会と政治局等の問題……かかる一切の矛盾が、党に煮つまり、論争が激化したのだが結局それに結着をつけえず、一方に官僚主義があり、相互に転化しあひ。そしてあまりにも当然のこととして、官僚主義は勝ちを制したのであつた。まさに問題は、共産主義社会を明確に射程に入れ、それを一から目的意識的に建設していく内実をもつ党、この問題であつたのだ。いかね「プロ独編集委」の諸君！(この点は再びⅥで触れるであろう)もはや明らかである。彼らは、資本主義批判を根底からやりえず、それ故、プロレタリアートの革命の意義をつかみえず、最終目標をはつきりさせえず、かくしてアナルコ・サンディカリズムに転落したのである。

然成長的にまかしてしまふわけにはいかなないのだ。レーニン程、プロレタリアートの革命の問題を、プロレタリアート一般に解消してしまふ傾向と断固として闘つた人はいない。彼は、党目前衝を、それが立脚する場のプロレタリア大衆を極めて厳密に考えた。だから、「ロシアにおけるプロレタリアートは七千人」と喝破したのであつたが、このレーニンの思想は、一貫している。一九年の内戦の最も困難な時期、彼は、党の整風を行ない、「党週間」を設定して、コルチャック・デニキンとの前線におもむくこと、及び、共産主義土曜労働に参加しているか否かによつて、これを行つたのである(『労働者国家と党週間』)。まさに党、ただ党のみが、一切の「ブルジョアの権利の狭い視野」をふみこえる闘いを最後までおしすめていくことができるのである。プロ独権力は、この闘いの不可欠の条件なのである。こゝでついでに述べておくが、彼らはこゝろ中途半端になつているので、例の「六項目控除」についても、中途半端にしか考へていない。「自覚し団結した労働者」一般が、これを決定するのではないのである。

この点にも彼らは沈黙している。だが彼らの論理内容からすれば、党もまたプロ独と同じく共産主義の第一段階とともに消滅するといふことなのだろう。かくして党もなく、プロ独もなく、人口の大多数の労働者自身の「『自覚し団結した労働者の規律』に基づいて組織された社会的労働組織」(P四四)としての「統制機関」と、「その国家組織自体を止揚するための、意識的な『真に大衆的な前進運動』」(P四五)の社会、そして、この社会では労働者＝全住民の中に「自覚」・「自己規律」・「団結」等が、みなぎつていくといふわけだ。これこそ、無政府主義、アナルコ・サンディカリズム

V 現代過渡期世界把握の 完全な欠落にたいする批判

彼らの「綱領」では現代過渡期世界に関する叙述は「Ⅱ世界プロレタリア共産主義革命の時代と世界プロレタリア独裁」に於てなされていゝ。だが、にもかかわらず、彼らは現代過渡期世界把握を完全に欠落させ、単なる形態、現象叙述に陥つてしまつていゝ。綱領該箇所を一見してわかることだが、「くでくになつた。」・「くによつてくされた(なつた)」という表現がやたらと目につくことから、それはよくみてとれるのだが、ともかく、この現代過渡期世界を止揚していく党の立場が、全く忘れ去られ、その結果、何かしら、歴史発展の不可避の段階としての現代過渡期世界、そのような歴史法則の展開過程としての叙述になつてしまつていゝ。もちろん、プロ独ロシア樹立以降の歴史が、こゝろなつてきた、という叙述は、構わぬいし、必要なのだが、それは何よりも、第一に党的観点からの総括として述べられるべきであらう。だから第二にその上に立つた止揚の内実、党建設の方向が浮きぼりにされねばならない。彼らは、だが最後まで、この党の視座を欠落させ、それ故、現代過渡期世界を一つのものとしてとらえられず、結局、日本における闘いの組織化＝党建設からという一國主義に陥り、世界党建設は完全に彼岸化されるのである(最後の点はⅦで検討する)。

現代過渡期世界とは何なのかはつきりさせられねばならぬ。現代過渡期世界とは、プロ独ロシアの樹立に伴う世界プロレタリアートの決定的に有利な条件の下で、レーニンを筆頭とする世界の共産主義者がコミンテルン世界プロレタリア指令部を創建し、世界革命を闘いとらんとしたことに対し、ブルジョアジー帝国主義者が、先進国プロ（ドイツは特に重要）の、とむわけの未成熟につけいり、この先進国プロを先行的に圧殺し、封じ込め、世界プロレタリア陣営を分断し、自らは、反革命同盟を形成して、世界の帝国主義支配体制で維持したことによって現出した世界なのである。そこで我々は、なによりも、レーニン・コミンテルンの歴史的限界に最も着目し、それ故にその限界を固定化させ、多くの犠牲を世界共産主義運動に与えたスターリンの誤りを総括として引き出さねばならないのである。何かしら、歴史發展区分として、現代過渡期世界があるのでは決してなく、主体客体的には世界（同時）革命の諸条件が成熟していながらも、レーニン・コミンテルンの歴史的限界、それにつけこんでの帝国主義による先行的圧殺によってこそ現出してしまった世界、そして、それをスターリンが完全に固定化させてしまった世界なのであって、その意味で、世界資本主義体制から世界単一プロ独への過渡期として我々の党的立場から把握されるのである。このところがまずおさえなければならぬ。

ではレーニン・コミンテルンの歴史的限界とは何か。それは次のような事態の中から見るとされることである。まずレーニン自身が、見事に分析してみせた帝国主義の諸特徴としての寄生性と腐朽性、その全世界への拡大である。ここからプロレタリアートの階級闘争の国際的な結合の根拠が、同時・同質的に深化したと、しかも既それがあの有形で創建されるや否や、まさにそのことによって世界プロレタリアート、被抑圧民族に乗りこえられてしまったこと、その自然成長性に押馳してしまつたこと、これである。ドイツ・スバルタクス・グループ（K.P.D.）を始めとする共産主義者の未成熟、そしてレーニンのお膝下でさえ、四月テーゼをめぐる論争やドイツとの講和をめぐる論争をみてもわかるように、未だ未成熟であつたというこの歴史性に規定され、廻り道を余儀なくされていたとはいへ、問われていたのは、コミンテルンの改組の問題であつた。従来政治宣伝・暴露の党から、党直轄の軍隊たる赤軍をもつた世界単一プロ独樹立へ向け、世界革命戦争―世界同時革命を闘い抜く党、世界非合法党への改組である。【注四】。そしてこのとき、我々が、Ⅱでみたプロ独―共産主義の領域の問題が、軸点になるのである。この改組への突き上げは、レーニン・コミンテルンにとつて、次のような具体的事実として現出していた。種々の形をとつてあらわれてきた極左主義である。第一はレーニンが「共産主義における『左翼』小児病」で批判した「左翼主義者」である。レーニンの彼らへの批判は全く正しく当を得たものであつたが、だが問題は、彼ら「左翼主義者」が何故現出したかの点であつた。彼らの出生の秘密は、実は、コミンテルンを創建する程に世界のプロレタリア陣営が進出したが、そのことによつて要求されたコミンテルンの改組が、着手されなかつたことにあるのであつて、だからかの「左翼主義者」への批判は、レーニンの作業をより一歩すすめた批判が、必要とされるのである。次に第二に、スルタン・ガリエフ等の回教徒組織中央ビューローの「極左主義者」達であつた。彼らは、軍事へゲモノを優先させ、赤軍への辺境諸民族の組織化、これによる

にマルクス後期の時期から芽生え始めていた植民地従属諸国の民族運動等が、拡大し、プロレタリアートの闘争と結合していく根拠がまた成熟してきたことがあつた。そしてこの上に第一次大戦における全世界的なブルジョアジーの分裂・疲弊と、プロ独ロシア成立に伴う一挙的な革命運動の成熟があつた。またこの中で、それまで、国際プロレタリアートの軸点であつた第二インターは、社会排外主義へと転落、解体していった。つまり一言で言えば、世界をプロレタリアートとブルジョアジーの単一の階級間戦争の戦場として成立させる条件が成熟していたのである。一国一地域毎の階級闘争の事情に直接に規定されない単一の独自の領域としての世界革命の領域、一つの闘争、一つの革命、一つの戦争の領域が成立しうる客体的根拠が、だから問題は党に集中された。この物的諸条件を一挙にあるいは徐々にでも現実に転化するところが、共産主義者に問われた。当時共産主義者と呼ばれる人は、レーニンを筆頭とするツインメルワルド左派として結集をなしていた。ツインメルワルド左派は、コミンテルンを創建した。ここに一つの独自の領域として世界革命を闘い抜く党―国際共産党が現実のものとなつた。だが、だが、問題は、いかなる内実をもつてこれを領導し抜く党なのか、であつた。まさにレーニン・コミンテルンの歴史的限界とは、この更なる一歩を明確に提起し、実践しえなかつたところにある。文字通り全世界のプロレタリア大衆、被抑圧民族の革命運動を一つにまとめる国際共産党の建設、なる程それは巨大な一歩ではあつたが、にもかかわらず、それ自身、自然成長性の中にあつた。左程までにプロ独ロシアの樹立に伴う世界プロレタリアートの成熟はすすんできていた。というよりこういつた方が正確であろう。つまり、コミンテルンは、

武力解放を様々に計画し、着手した。彼らの言っていること、やっていること、やろうとしたことは、悪く言えば革命的ロマンティズムの極致であるが、だが、このようなものを生み出す根拠はやはりあつたのであり、だから、この一種の軍事無政府主義を止揚する党内の内実こそが問題であつた訳である。更に第三にロシア共産党内のいくつかの極左的雰囲気であつた。ポーランド進撃に際してのレーニン自身もそうであつたが、他にブーリン、ジノビエフも時には驚く程の極左主義者であつた。ところで、レーニンは、コミンテルンの組織問題にまで、系統的、包括的に問題を展開しえなかつたが、現代過渡期世界に対する党の立場、プロレタリア国際主義の立場を見事に原則として提起していた。レーニンは述べている。「プロレタリアートの独裁を民族的なもの（すなわち、ある一国だけであつて世界政治を決定する力をもたないもの）から国際的なもの（すなわち、すくなくとも数個の先進国のプロレタリアートの独裁であつて、世界政治全体への決定的な影響をもちうるもの）にかえる任務が焦眉のものとなつてきているだけに：：きわめて根ぶかい小ブルジョア的、民族的偏見との闘争がますます前景におしだされてくる。小ブルジョアの民族主義は、諸民族の同権を承認すること、ただそれだけを国際主義と称し、民族的利己主義を不可侵なものとして放置しているが、一方、プロレタリア国際主義は、第一に、一国のプロレタリア闘争の利害を世界的規模におけるこの闘争の利害にしたがわせることを要求しており、第二に、ブルジョアジーに対して勝利をおさめた民族が、国際資本をたおすために、もつとも大きな民族的犠牲をすすんで、はらう能力と覚悟を要求しているのである。」（『民族植民地問題に関するテーゼ原案』、傍点は我々）この現代過

渡期世界に於るプロレタリア国際主義の原則を、一つのものにまとめあげ遂行していくものとして、コミンテルンが考えられているわけである。

このような状況の中で、コミンテルンは、やはり自然成長的にてあり、系統的ではなかったが、改組に手をつけはじめる。武装し、中央集権化された単一の非合法党への道である。ロシアの赤軍は、コミンテルンの全ての代議員にとって、世界革命のための軍隊、コミンテルンの赤軍であった。トハチエフスキーは、赤軍指令官として、公然と、ロシア赤軍のコミンテルンの赤軍への改組を提起する。武装闘争は、あまりにも当然のこととして、皆に受け入れられ、従ってまた非合法に習熟することが、全ての共産党に求められた。また中央集権化された単一の党化は、もつとも抵抗も多く、遅れるが、四回大会では、執行委員の選出を、各党の代表者からというのではなく、大会独自の選出とすることにもみられるように、一応の形をととのえる。だが、この党の改組は、単に形式にとどまるものではなかったし、またとどまってはならなかった。何よりも我々が、展開したような共産主義社会を射程に入れた党への改組として、それはなされねばならなかった。党直轄の軍としての赤軍、党の非合法化、単一の中央集権化といったことは単なる技術、戦術レベルでとらえられてはならないものであったのであり、党存立の原則としてなされねばならなかったのであり、かかる原則を確立しえず、改組は、非組織的、形式的、技術的なものとしてなされてしまい、この限界が後のスターリンによる歪曲に逆に利用されることになったのである。

以上、我々が述べてきたような現代過渡期世界が現出したときの

的敗北としてとらえられねばならないのである。彼らはこの点を欠落させて、スターリンの資本主義批判の誤り―「マルクス主義の経済主義的歪曲」について述べていくのだが、これだけ述べるのでは不十分なのだ。この党の敗北の結果としてコミンテルンのプロレタリアという一民族国家の利害追求の道具化があり、ドイツ、フランス、イタリア等の先進国プロレタリア革命のおしなべての敗北があった。だが、一方で、歪められた形であるにせよ、東欧における一連の革命の勃発がある。このような点にも彼らは言及していない（「解説」中でさえ）。次に第二に、コミンテルンの党的大敗北―先進国プロレタリア革命の挫折という巨大な負の遺産の中で、それを徐々に克服してきた中国、北朝鮮、北ベトナムの革命の評価がなされていること。これらの革命こそが現代過渡期世界の諸特質（帝国主義の世界的に拡大し深化する腐朽性、寄生性、それ故の階級矛盾の同時同質的成熟、帝国主義が自己の世界支配体制を維持するために何よりも自己の足下のプロレタリアートを先行的にキメ細かく圧殺し分断せねばならず、かくすることによって、矛盾が、植民地、半植民地、従属国地域に集中し、かつその弾圧がえてしてキメ細かさを欠かざるをえないこと、また、かかることに根拠をもって、植民地従属国での革命が、「資本主義の発展の諸段階」とびこえて直接に社会主義にすゝめる党の指導があったこと等）の故に、スターリニズムの膨大な負の遺産は徐々に清算されてきたのであった。コミンテルンが形式的には立派な国際党であったが故に、スターリニズムの負の遺産はますます巨大になり、かくして一民族、一地域の党がこの世界的任務をその肩に担わねばならなかったのであった。この点の把握が彼らには全くうかがえない。

党の問題を欠落させてしまっている。彼らは、一七年以降の時代を一般的に「世界プロレタリア共産主義革命の時代」として、種々の事象をただ現象的に羅列し、何かしら自ずと、この「世界プロレタリア共産主義革命」はなしとげられるかのよう描いてしまっている。少くとも彼ら自身は、この革命全体に対して外在的、部分的でしかなく、世界革命における日本プロレタリアートの任務は何一つ提起されていない。何よりも党はコミンテルンの歴史的境界―敗北という把握によってこそ、またそれによってしか、現在までの諸事項に一貫した態度をとることはできないし、また正しい評価をも与えることはできない。階級闘争のダイナミズム、生き生きした歴史の現実を、彼らは一切見えないように見える。彼らには、レーニンがコミンテルンの任務として提起したプロレタリア国際主義の原則などてんで頭にないようである。

以下、かかる彼らの欠陥が、どのように現代過渡期世界把握を貧しくしているかみてみよう。

先ずスターリニズム批判である。彼らは次のように述べている。「⑩世界プロレタリア共産主義革命の一时的な敗北、後退の中で、ロシア共産党と第三インターの内部に現代修正主義の潮流が生み出された」（P十一）。単なる現象把握としては正しい。だが、党の綱領への句としては、共産主義者の把握として誤りである。我々が既に述べたように、スターリニズムの発生は、レーニンの歴史的限界の固定化、コミンテルンの党的敗北としてあったのであって、この点こそが第一に押し出される必要がある。「世界プロレタリア共産主義革命の一时的敗北、後退」とは、このように現象的一般的に述べられるべきではなく、何よりも、コミンテルンの改組の挫折、党

第三に、だから彼らは、ベトナム―インドシナ革命戦争の世界的意義についてみる事ができない。第二のことを更に徹底させ、その止揚の諸条件も生み出したその意義である。

ベトナム―インドシナ革命戦争、それを指導し抜いたベトナム労働党こそ、現代過渡期世界のプロレタリア党に負われた負の巨大な遺産を一身に担い、その清算をなし、新しい出発の諸条件を成熟させたのである。レーニンが国際党たるコミンテルンの任務として述べたプロレタリア国際主義の任務は、一小民族の共産党たるベトナム労働党が一身に担い、だからこそそのことからくる矛盾と困難、歪みにもかかわらず、三十年という長い時間にわたる革命戦争によって、その責を全うしてきたのである。その闘いこそ、一方における中国革命戦争、朝鮮戦争、第一次インドシナ戦争の米ソ冷戦構造に規定された歪みを孕んだ戦争と、一方におけるアルジェリア革命戦争、アフリカ、ラテンアメリカ等の民族独立解放運動、総じて、反帝―民族解放革命戦争の一つのものとし、これらを止揚し、民族解放―社会主義革命戦争に高めるとともに、帝国主義国内プロレタリアートの諸闘争、あるいは中国プロレタリアに象徴されるプロレタリア革命の根拠地に打ち固める闘いをついにまとめあげ、コミンテルン再建の根拠を成熟させてきたわけであり、そして今春（、七五）の大勝利によって一挙にそれを成熟させたのであった。民族解放―社会主義革命戦争の完成とともにその止揚、つまり民族止揚（民族国家廃絶）―共産主義革命戦争―世界革命戦争への転化を準備したのである。まさにベトナム労働党こそ、一小民族党でありながらも、世界党の任務を担い、かくしてベトナム―インドシナ革命戦争は、単なる一地方、一民族の戦争ではなく、世界革命の領域として闘わ

れてきたのであった。それ故、矛盾と歪みはもつとも鋭くベトナム労働党に集中されている。だからこそ我々世界革命戦争派たる我々は、コミンテルン再建世界党創建に向け共に進むべく問題を提起し、党派闘争をすすめていかねばならないのだ。我々は現代過渡期世界の民族解放闘争を、「プロ独編集委」の諸君のよすがに、「帝国主義は、被圧迫従属諸国民の反対闘争を『民族革命運動』(略)ともいうべきものに転化させていること、そして世界プロレタリア共産主義革命のはじまりは、この民族革命運動をプロレタリアートと共産党が指導し、国際プロレタリアートとの闘争と結びつけることによって世界プロレタリア共産主義革命に転化した」(「解説」P三六六)「このように民族解放闘争の性格の変化が、他方より一層世界プロレタリア共産主義革命の前進をつくりだしたのである」(前出)といった具合に一般的客観的に述べてしまふことはできないのである。彼らは、ベトナム、インドシナ人民が背負いこんだあの犠牲、困難、歪みの世界史的重さに思い至ったことはいないのであろうか。

さて、第四に、彼らは、ベトナム、インドシナ革命戦争によって生み出されてきた全世界の革命戦争派に全く考慮を払っていない。我々世界革命戦争派こそ、再び成熟してきたプロレタリアートの世界的結合、コミンテルン再建の状況の中で、その現実を止揚していく核として存在しているのであり、三で述べたベトナム労働党、五で述べる中国共産党、更に朝鮮労働党、キューバ共産党等々との国際的党派闘争を組織し、推進していく核たるべき任務をつきつけられているのである。既に何度も強調してきたように、自らの党的立場を明らかにすることなく現代過渡期世界を把握することはできな

がていくこと、それを単一の共産党建設によって成しとげていくことができないという、まさにそのような物的条件が形成されたという点に無自覚であり、それ故この世界単一の党の建設を抜きには決して現代過渡期世界は止揚しえないという点を理解していない。だから今尚、中国共産党はコミンテルン解散を総括しえず、それに拝跪しているのである。中国共産党の「平等、領土保全、主権と独立の尊重、相互内政不干涉という原則」、総じて民族自決—労働者国家相互自決の綱領的な原則化は、「プロ独編集委」の諸君のような世界プロ独の必要性一般から中途半端に批判するのではなく、我々が示してきたようなプロレタリアートの革命の最終目標からの規定を、現代過渡期世界把握で基礎づけることによってなされねばならない。だからこそ我々は、この点に関して、中国共産党と党派闘争をやり抜き、世界党建設を成しとげねばならないのであって、彼らのように、一般的客観的に中国共産党の評価を「主要な側面は、レーニンの継承・発展という積極的側面であり、スターリンの誤りの継承という否定的側面は、従属的な側面である」(P五七)ここで蛇足ながら付言しておくが、なんでこうも日本の新左翼は、毛—中国共産党について語るとき、用語まで、毛—中共流になるのか！何と底が浅いことか！などと言って済ますことはできないのである。このような党派闘争の観点なしの客観主義の故に、彼らは「綱領」では、中国共産党への何らの評価も示さず、「中国を先頭とするプロレタリア諸国」(二二)とか何とか、中国万才、中国ベッチャリズムに陥っているのである。さて、最後に彼らは現代帝国主義—現代帝国主義国家を正しく把えきれていない。彼らの言っていることは、国際反革命同盟—国際反革命軍事同盟、及び新植民地主義の二点につ

第五に、中国共産党への評価の問題。彼らの中国共産党、毛沢東思想批判はプロ独—社会主義論の領域として、とりわけ、社会主義における「共産主義社会の将来の国家組織」とプロ独との混同、それ故の世界プロ独への消極性、原則的否定、民族問題での誤りとして展開されている。だが彼らのいう「共産主義社会の将来の国家組織」とプロ独との区別をつけていないとの点は、既に我々が、で詳しく論じておいたように、逆に彼らの誤りをあらわしているものであって、中国共産党の誤りではなく、むしろ中国共産党がその点をより厳密に明確に世界との関係で提示しえていないことこそが批判されねばならないのである。逆である。彼らは、誤った歴史批判を基礎とする組織—党への日和見主義に陥り、プロ独—共産主義論領域での中途半端性、曖昧さを結果しているのである。だから彼らの批判を根拠にして、中国共産党の世界プロ独の消極性を批判していくことはできない。中国共産党が「世界」に於て日和見主義、誤りに転化しているのは、決して中国共産党が、プロ独国家と「共産主義社会の将来の国家組織」との区別をつけえていないところに根拠をもっているのではなく、今まで我々が述べてきた現代過渡期世界把握の誤り、その欠落の故である。中国共産党は実は彼らと全く同じように現代世界を極めて客観主義的にプロ独ロシア樹立に始まる一連の世界プロレタリア革命の一歴史時代と捉えており、スターリニズムの歴史法則主義に足をすくわれているといえる。彼らは、プロ独ロシア樹立に伴って、各国各地域毎のバラバラの不均等な発展を示している諸階級闘争を、何よりもその各国各地域の諸階級の未成熟、不均質性として把握し、それ故かかる各国各地域の諸階級闘争を世界単一の階級闘争という一つの独自の領域へとまとめあ

きる。何と貧弱なことか。第一に国家独占資本主義について何ら触れていないことは致命的である。それが未だ明確な形をとっていないかった時期にレーニンは既にそれについて端的なことを述べている。独占資本主義に対する国家独占資本主義、帝国主義に対する現代帝国主義というまた別の新段階を区分することはできないが、にもかかわらず、現代の諸特質を洗い流して、帝国主義—独占資本主義一般に解消する訳にはいかない。資本の集積、集中の更なる進行によって巨大独占の形成とその国家の併呑が結果し、かくて社会生活の全ての領域に国家が介在していること、そのことを通して帝国主義の(へ政治)の独特の重要性を導き、資本主義がそこへと不可避につき動かされていく恐慌への道を一寸刻みに前方に引き延ばすこと、そしてかかる一切から、腐朽性、寄生性は未曾有に拡大し、深化し、社会生活の全ゆる領域で矛盾は集積し、腐敗が進行していること、これらの点は最低限述べられる必要がある。次に第二に、ここからして、プロ陣営の世界革命戦略に対する帝国主義の側の国際反革命戦略の重要性が述べられねばならない。反革命同盟、新植民地主義は、かかる国際反革命戦略の一環であって、これらをそのよりの系統性の中にとらえねばならない。だから第三に、この二つのことに加え、労働者国家への帝国主義からする戦略—修正主義化への促進について一言ふれる必要がある。国際的分業体制—世界市場機構へのとり込み等。更に第四に、かかる一切のことからして、帝国主義間矛盾はますます深化し、不断に第三次大戦に向け、各国帝国主義をつき動かしていることへの言及。そして最後に、現代帝国主義国家が、第一に述べたような肥大化を特質とするとも、それが極めて世界的連関の中に存することつまりイストラエルを典型とす

る如く、ある一地域の社会から発生してきた国家というのではなく、世界全体という社会から発生してきた国家（朝鮮、ベトナム、ドイツの分断国家もまたそうである）であることも述べられねばならない。

今、述べてきた一切が抜け落ち、貧弱な内容の、羅列になっている。以上、詳細にみてきたように、「プロ独編集委」の諸君は、現代過渡期世界のいくつもの事象をみてはいるが、それらを一つのものとしてみることができず、現象の形態の羅列に終ってしまっている。だがこのことは、既に何度か強調しておいた党的立場への無理解、組織Ⅱ党への日和見主義の結果であるといえる。だから次に、この点を批判しておかねばならない。

Ⅶ 組織Ⅱ党にたいする日和見主義的態度を批判する

既に我々は、Ⅰ～Ⅳの時々に応じて彼らの組織に対する日和見主義を暴露しておいた。「何故綱領からなのか」への中途半端性、綱領論争―過去の諸組織の総括の不充分さ、現代過渡期世界把握の欠等は、このような彼らの態度の現われであった。彼らの組織日和見主義の根本は、彼らが「綱領」から切り込んでいくという全く正しい態度を示しながら、しかし、それがどうも身につかず、借り物で、レーニン組織観の根本である党派闘争の決定的意義をつかみえず、何かしらアブリアリに、党派闘争とは別個に、正しいものを提出しようとするところにあるのだが（Ⅱで展開）、ここでは、それがどのように最終的に仕上げられたかを見ることにしたい。

ことに至っている訳だが、これは、次にその当然の成り行き、自然成長的發展として、一國主義に導く。この点については既にⅤで多くを述べてきたが、彼らは、プロ独ロシア樹立以降のこの現代過渡期世界的把握の地平を何ら継承することなく、結局は、まずは日本の党建設という具合にし、国際共産党の再建ということとは述べるは述べても、この日本の党建設との関連は一切明らかにしえず、別個に並記し、つまりは国際共産党建設は彼岸化しているのである。何度も強調してきたが、プロ独ロシア樹立以降、全国各地域の諸階級闘争の不均等を、それぞれの党の不均質の問題として把握しうる諸条件が生み出されたのであり、だから、諸々の全国各地域の階級闘争とは区別される一つの独自の領域たる世界革命の領域を世界党建設によって形成しなければならぬのである。どの国、どの地域の階級闘争であれ、まず、この問題があるのであり、ここで自然成長主義に陥ることは、多大の犠牲と、歪みと、ジグザグを余儀なくされるのである。あらゆる党建設の試みは、だから必ず、その当初から、出発から世界的になされねばならないのである。

綱領は世界綱領としてこそ意義をもつ。この一点での一切の日和見主義は、これがどんなに世界的闘争をやり、主観的思い入れをやるうと（前者は、IRAやツパロス、パレスチナゲリラ等、後者は日本のエセ国際主義者共）やはり一國主義に転落せざるをえないのである。なる程、日本のプロレタリアートの現状は、本当に眼をおおわしむる程に後進性の中にある。だが、そうだからといって、プチ・ブル特有の焦りを感じ、ともかくこの後進性を打破しようとして日本一國に閉じ込めることは、何の解決にもならないばかりでなく、逆にこの後進性を固定化させざるをえない。日本階級闘争のこの後

彼らの組織日和見主義は、まず第一に、彼らが一体何であるのかというこの混乱に拡大される。彼ら自らを「我々」としていうとき、この「我々」は「綱領」中では、「日本プロレタリアートの階級党であるわが党」（①P六）、「労働者階級の党であるわが党」（⑩P八）、「党」（Ⅳ前文P十四、⑦十三P十五、⑧十二P十七、⑨一P十八、Ⅳ後文P二二）として表現されている。ところが全く不思議なことに「綱領」⑩では「国際共産党」という表現が出てきて、この「綱領」を掲げる当の主体はこの「国際共産党」という具合に語られている。一方⑩でも「国際共産党」という表現があるがこれは「共産主義インタナショナル（国際共産党）」となっており、コミンテルンそのものを指しているので誤解の余地はない。だが⑩では、「世界プロレタリア共産主義革命の前進と究極の勝利のためには：国際共産党を再建することが急務となっている」と述べられていて、この間の混乱が増幅されている。「解説」においても「再建されるべき国際共産党の任務は」云々（P三八）となっていて、彼らは結局、自らが何者なのかを明確に述べることなく、現にある「我々」、日本プロレタリアートの「党」、「国際共産党」の三つに分裂していつているのである。だが一方で、彼らは、Ⅱでも述べたが、綱領作成の根拠、必要性をもつばら日本から語っていること、中国共産党、ベトナム労働党に対する態度が並列的、外在的であること、現代過渡期世界把握が外在的、現象羅列に終っていること等からして、日本一國の党建設しか實際上射程に入れていないことがあって、「綱領」とのソゴが生じている。

このように彼らの組織日和見主義は、一体自分達は何であり、どうしようとしているかを中途半端に、曖昧にしたままにするという進性は、何よりも日本の党の未成熟であり、そしてこれは決して日本一國の見地から克服しうるものではないからである。もちろん全くその可能性がないとは言えぬかもしれないが、すくなくとも日本プロレタリアは多大の犠牲を強いられることになる。

こう言うと、現在の国際共同軍事行動の表面だけを見て、「あんなゲリラ闘争は何の影響も、日本のプロレタリアに与えていない」などという人が必ず出てくると思うので、一言断っておくが、なる程、現時点では、あのようなゲリラ闘争だけでは、何ら影響力を日本階級闘争全体にもちえないといえなくはなさそうだが、このように見方は、実は、木をみて森を見ぬ類である。未だ自然成長的な結合の段階にあり、何の結合の基準もはっきりと確定していない現状が打破され、単一の政治綱領を持ち、それに基いた世界的結合が各世界革命戦争派の中に生み出されたとき、世界の階級闘争の局面は一変するであろう。我々は実例を既に見て知っており、その確信はゆるぐことはない。コミンテルン創建のあの激動の時期という実例を。

さて、彼らのようなかかる組織日和見主義としての一國主義は、当然にも、革命戦略における世界革命戦略の消極性となり、何はともあれ、日本におけるプロ独樹立が自己目的化され、日本一國革命↓世界革命なる図式が多かれ少かれつくられる。こうしてあとには、マル戦式三段ロケット方式や、日共版二段革命等々が、一國、世界各々に応じて分化を上げていくことになる。世界党の闘いを前提としない全国各地域の革命戦略は、必ず、一國、世界双方において二段階になるのであり（三段階、それ以上にもなりうる）、だからこの革命戦略の問題は、世界党が、それぞれの国・地域での革

命の過程にどのような刻印をおしていかかという世界革命の領域—世界党の闘いとして述べられぬ限り、一切不毛な論議に陥るのである。

さて、彼らの一国的組織建設の思想は、ついで、今の日本では不可避に、合法—半合法主義、非武装主義に導く。世界革命の領域の仕事は断念し、ともかく日本からという具合になつてゐるために、そしてそのことと照応して世界プロ独の内実が、その任務が全く明らかにならねばならないこと、そして、党が武装することが出てこない。党自身が独自の暴力装置を持つ必要は、ただちにその組織の非合法強化を予想させるのだが、この党の暴力装置—赤軍の建設は、現代の世界革命の根本問題なのであり、組織問題の中心である。この点に触れない綱領は、現代の綱領ではない。

「軍事は技術である」とか何とか言つて、綱領から軍事問題、軍建設の問題を一切捨て去り、本当に技術的なものとして扱ふとする人がいるのだらう、それはそれでやってみるがよい。立派な軍事がやれることだらう！一体彼らは六十九年以来何をやってきたのだらう、彼らは元赤軍派だそうだが、彼らは軍事アレルギーでもおこしているのか？彼らが身をもつて体験してきた六〇年代末—七〇年代の階級闘争の中で問われた中心問題が軍事問題であつたことは、まぎれもない事実である。にもかかわらず今、このように軍事をこゝなに見事に忘れ去ることができるとは！！

この軍事問題に対し、我々はその自然成長性を批判し、党の立場から、共産主義社会を明確に射程に入れた党の立場から把え返し、党直轄の軍たる赤軍建設を組織の根本思想にまで高めた。それは、

準に引き戻されるであらう。

Ⅶ まとめ

以上我々は、「綱領」が革命党の綱領としては全く不十分であり、誤りに満ちたものであることを暴露してきた。それは決して、「わが国の労働者階級が闘いとらねばならない、また、近い将来必ず闘いとるであらう労働者革命党の、公然たる旗印」(P一)にはならぬであらう。

我々が既に何度も強調してきたように、党綱領に対するもつと厳格な姿勢が求められる。今ある全ての潮流、サークル、党派と敢然と一線を画すこと、その基準を綱領として提出することが問われているのであり、そのためには、レーニン組織観の核心である党派闘争の意義がしっかりとつかまねばならない。従来の諸論争、運動への総括作業は、その不可欠の条件である。かかる態度と作業が積み重ねられてこそ、我々が、本論で指摘したプロ独—共産主義論の問題、現代過渡期世界把握の重要性等につき、理解できるであらうともかく、R.G派からマズク学んだ資本主義批判と、一九年綱領だけからは、綱領はつくりえないのは明らかである。

へ付く 「綱領」最小限綱領についてはここで何

もふれなかつた。別の機会に述べた。

労働者国家をも含めた一切の民族国家の廃絶のテコ—暴力装置であり、一切のブルジョアジー、反動、反革命層、分子の鎮圧の任務を担い、そして、プロ独権力の中軸として、共産主義的無償労働の組織化の中核部隊として、世界革命戦争を最後の最後まで闘い抜くものとして確定されている。一方彼らは、軍事の自然成長性により越えられ、政治をそこで取りもどそうとしたのは良かったが、その過程で、軍事清算主義に陥り、軍事—軍建設を回避し、一国的合法的非武装主義に到達したのである。口先で「武装した党」などと言つてみても、その政治内容、質を問わない軍事一般はないのだ。彼らは「解説」のスターリニズム批判の中で「そこ(世界プロ独)では当然民族国家の枠は廃止され」(P四十六)と述べ、また中共を批判して、「内政不干渉をプロレタリアート党の原則とするわけにはいかな」(P六十)と述べ、この点での展開の端緒は述べているが、組織問題にまでつめられていない。決して国家の軍隊に解消されない党独自の軍隊なくして、かかることができないわけがない。

かくして、党建設の唯一の正しい道である世界党創建の当初からの目的意識的遂行は、その中心問題として、党直轄の軍隊—赤軍の建設を伴い、そしてこれ故に、CIA、イスラエル秘密警察等との攻防と勝ち抜くためにも、非合法、非公然体制を余儀なくされるのである。この点、彼らは何とお人好しな、幸せな人々であらう。一國ボケは、全ての誤りのモト！

かくして、彼らの組織日和見主義は、その完成をみる。彼らが個々の的にいくら経験を積み、革命への情熱に燃え、自己犠牲、献身性を誇つていようと、この「綱領」からは、その一切は汲み出しえないであらう。この「綱領」を党の基準とする「我々」は、八派の水

Ⅷ 注記

【注一】(P十三)

「諸使用価値は、質的に相異なる有用な労働がそれらの中に含まれているのでなければ、商品として対応しあうことはできない。その諸生産物が一般的に商品の形態をとる社会においては、自立的な生産者たちの私事として、相互に独立して営まれる有用な諸労働のかかる質的区別が、一つの多岐なる体制、すなわち社会的分業に発展する」(『資本論』P四七)。「相互に独立して営まれる。しかし社会的分業の自然発生的な環として相互に全面的に依存しあっている。私的労働は、たえずその社会的、比率的な尺度に還元される—略—という科学的な洞見を経験そのものから生じるためには、その前に、完全に発達した商品生産が必要である。」(同前P八十—八十一)

「商品」を「労働」に還元するだけでは十分ではないのであって、それを二重の形態における労働に還元することが必要なのである。すなわちこの形態にあつては、労働は、一面では、具体的な労働として諸商品の使用価値に表わされ、他面では社会的に必要な労働として交換価値において計算されるのである。：：第一の面からみれば具体的な労働の相違が分業に現われ、第二の面からみれば労働の無差別な貨幣表現に現われる。」(『直接的生産過程の諸結果』国民文庫版、P三六—三七)

【注二】(P十六)

価値規定ということにおいては、もちろん、価値—使用価値の二者闘争性を示すわけではないが、しかし、この二重性はやはり、全くないとはできない。常に二重性へと展開す

る可能性をもっているのである。これは、労働の社会的生産力の発展が、そして社会的労働組織が、「働きに応じてとる」段階にある以上、不可避である。

この点に關し、『烽火』再刊一号風巻論文では、価値規定を二重の形態をもつ可能性を孕む労働からとらえることに失敗し、労働の二重性は残るが、価値—使用価値の分離はないといった混乱を示している。

【注三】 (P二八)

尚、この一国的プロ独権力の任務を、プロレタリア国際主義の現在の意義からとらえかえした把握はⅦで扱う。

【注四】 (P二八)

この党組織に關する規定は、世界革命戦争路線に規定された党組織観であり、へ戦略・戦術へから党組織の基本性格を規定しようとしたものである。

このような党に關する観点から、「レーニン型の党」では軍事を組織しえないと規定したが、ここでは「レーニン型の党」とは「宣伝・暴露」を行うという点でのみ考えられていた。更に、この規定には非合法と軍事をめぐる混乱が含まれていた。更即ち、レーニンの時代では、宣伝、暴露が非合法であり、それが非合法党建設の手段たりうる。しかし、現代の日本では軍事が非合法であり、したがって軍事を軸として非合法党が建設されるというものであった。ここでの非合法と軍事の混同は、一方では非合法活動を行っていればそれが軍事行動であるという

傾向と、他方では軍事行動だけが非合法だから、それ以外の活動領域、機関、部門は合法であるという傾向とを生み出した。

我々はこの党組織に対する態度を総括し、レーニンの綱領・戦術・組織を学び、復権することによって、蜂起、革命戦争を最高の闘争形態とするあらゆる事態に対応しうる党組織という基本点を確認し、それを現行的には非合法党建設・党の武装として実現していくことを確認した。

尚、党一軍に關するこの時期の誤りに規定され、我々はコミンテルン総括において、ロシア赤軍を世界赤軍に改組しえず、結局ソ連邦という国家の軍へ矮小化したことを指摘していた。これは、党を軍を組織するという点からのみ考えていたことの反映である。コミンテルンがソ連共産党の利害に、ソ連共産党が官僚的に変質しつつあったソ連の国家機構に解体していたことの総括こそが問題である。

尚、詳しいことは、組織に關する諸論文、および戦術論争を参照してほしい。

火 花 第 二 九 号

発行日 一九八四年一月十五日

編集発行 共産主義者同盟(火花)

定 価 三〇〇円